北方民族博物館研究報告３

能取岬西岸遺跡

2010

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

例　　言

1　本書は北海道立北方民族博物館の調査研究事業の一環で、平成17（2005）年から平成20（2008）年にかけて実施した能取岬西岸遺跡の発掘調査報告書である。

2　発見された動物骨分析、炭化材の樹種同定分析は、以下の方々から玉稿を賜った。
動物骨分析：　梅田広大氏（網走市立郷土博物館）
樹種同定分析：佐野雄三氏、渡邊陽子氏、守屋豊人氏（北海道大学）

3　上記以外の本文の執筆と図面作成、編集は当館の角達之助が担当した。

4　掲載した挿図は、地形図1600分の1、平面図・断面図80分の1と40分の1、微細図20分の1、遺物2分の1、図版は縮尺不同である。

5　出土遺物は当館にて保管、活用する。

6　調査および本書の作成にあたり、以下の方々のご助言を賜った。ここに記して感謝申しあげる。
（順不同、敬称略、所属は当時）
佐藤和利（紋別市立博物館）、和田英昭・米村衛・梅田広大（網走市立郷土博物館）、
熊木俊朗・高橋健（東京大学）

調査参加者

平成17年	角達之助、梅田広大、吉田守、酒井敦、間宮晃仁
平成18年	角達之助、梅田広大、吉澤諒、橋本翔
平成19年	角達之助、梅田広大 以下、交替で2名ずつ参加：金子清隆、平井徹、金井良、長田昌允、小嶋雄一郎、根岸洋介、横田春樹
平成20年	角達之助 以下、交替で2名ずつ参加：阿部槙人、五十嵐勇貴、小嶋雄一郎、後藤浩一郎、坂本健吾、長田昌允、根岸洋介、穂坂博聡、渡部英治、浅野大地

資料整理者　　角達之助、田中澄子

目　　次

例言

1　調査に至る経緯 …… 1
2　遺跡の立地と自然環境 …… 2
3　発掘区の設定と層序 …… 2
4　能取岬西岸遺跡2号住居址と出土遺物 …… 4
5　能取岬西岸遺跡出土の動物遺体 …… 32
6　能取岬西岸遺跡2号住居址において出土した炭化材の樹種 …… 38
7　まとめ …… 43

挿図目次

図1　地形図と発掘区 …… 3
図2　2号竪穴住居址平面図(1)・断面図(1) …… 6
図3　断面図(2) …… 7
図4　断面図(3) …… 8
図5　炭化材出土状況(1) …… 9
図6　炭化材出土状況(2) …… 10
図7　2号竪穴住居址平面図(2) …… 11
図8　床面出土土器 …… 15
図9　埋土出土土器(1) …… 16
図10　埋土出土土器(2) …… 17
図11　埋土出土土器(3) …… 18
図12　埋土出土土器(4) …… 19
図13　埋土出土土器(5) …… 20
図14　土器底部 …… 21
図15　出土石器(1) …… 23
図16　出土石器(2) …… 24
図17　出土石器(3) …… 25
図18　出土石器(4) …… 26
図19　出土石器(5) …… 27
図20　出土石器(6) …… 28
図21　出土石器・骨角器 …… 29

表目次

表1　ピット一覧 …… 12
表2　出土石器・骨角器一覧 …… 30

分析(動物遺体・樹種同定)　表・挿図・図版目次

表1　第2号住居跡出土動物遺体一覧 …… 35
表2　上顎骨および歯牙一覧 …… 36
図1　骨集中分布図 …… 36
写真　能取岬西岸遺跡2号住居跡出土の動物遺体 …… 37
表1　同定結果一覧表 …… 40
写真　炭化材の走査電子顕微鏡写真 …… 41

図版目次

図版1　完掘状況(東から)／発掘風景 …… 45
図版2　東側の炭化材出土状況(東から) …… 46
図版3　貼り床残骸と石器(南から)／粘土で巻かれた柱穴(東から)／北側の炭化材出土状況と周溝(南から) …… 47
図版4　出土土器 …… 48
図版5　出土土器 …… 49
図版6　出土石器 …… 50

1. 調査に至る経緯

北海道立北方民族博物館では、設立趣旨に基づき北海道のオホーツク文化とそれに関わる続縄文文化、擦文文化、アイヌ文化を先史文化調査の主眼としている。平成7年度以降は、調査研究事業として能取岬周辺の遺跡を中心に発掘調査を実施してきており、平成17年度からは能取岬西岸遺跡を調査している。

本遺跡をオホーツク文化の遺跡と最初に確認したのは右代啓視・西本豊弘の両氏である。現地を訪れた両氏は波蝕と風蝕により削られて露出した竪穴住居址の床面を確認し、その周辺にも竪穴住居址が存在する可能性を指摘している。そしてこの遺構が道東部では数少ない刻文土器を伴う竪穴住居址であること、遺構が波蝕・風蝕により徐々に失われつつあること等を指摘して関係者の注意を喚起している（右代・西本1983)。

両氏による最初の報告から約10年後の平成8年には、崖面に露出した住居址（以後1号住居址とする）が自然崩落によりさらに削られていることを確認した当館によって、崖面よりも内側で試掘調査が行われた(北海道立北方民族博物館1999)。記録保存の緊急性を要する遺跡であるにもかかわらず、当時の調査が1m×1mの試掘坑をランダムに掘削して遺跡の範囲を確認するにとどまらざるを得なかった理由は主に以下の2点にある。

1 1982年の本遺跡発見以降、現地で踏査調査が数回行われ、遺跡の範囲や遺物・遺構確認地点が略図化されているが（右代・西本1983；戸部1983；松尾1998)、それらの比較は崖面の崩落による地形の変化もあり正確さを欠く。過去の報告を参考にしながらも、再度遺跡の広がりを確認し、また正確な地形図を作る必要があったこと。
2 崖際を面的に広い範囲で掘削を行い、腐植土を取り除くことによって土地の崩落を促進させ、遺跡やその周縁地が崩落しやすくなる可能性が考えられたこと。

平成8年度の調査の主目的は、右代・西本両氏が提供した情報の検証と当遺跡の範囲や遺構の位置の確認、また竪穴住居址があるとすれば何件あると想定できるか、さらにそれ以外の遺構は存在するのか等、さらなる具体的な情報の蓄積におき、その成果を元にして今後の全面発掘のあり方を検討するものであった。

当時の調査の結果、崖よりも内側で刻文期に相当する竪穴住居址の床面が地表面から約2mもの深さの地点で確認され（以後2号住居址とする)、これによって地表面から観察できる窪みを以て竪穴住居址と想定することは、当該地域では慎重を要することが明らかとなった。また総数22箇所の試掘坑調査によって確認できたオホーツク文化期の遺物出土状況や試掘坑の断面観察により、1,2号住居址以外にも数件の竪穴住居址が存在し、刻文期から貼付文期に至る住居址が存在した可能性が指摘された（北海道立北方民族博物館1999)。

右代・西本両氏の踏査調査や当館主体の試掘調査等によって、能取岬西岸遺跡における保存・調査計画に際しての基礎的データは整ったといえよう。少なくとも2号竪穴住居址については、崖際より内陸に位置しており、掘削による土地の崩落の危険性は低い。道東部におけるオホーツク文化刻文期の集落の希少性・重要性、および能取岬西岸遺跡の自然崩落による遺跡の消滅に対する危険性についてはあらためて述べるまでもなく、平成17年度から平成20年度にかけて、2号住居址の発掘調査に着手した。

遺跡は国定公園内の網走市の所有地にあたるため、調査は国定公園を管理する網走支庁地域振興

部環境生活課および網走市教育委員会の許可の下に行った。調査に際し、立木の伐採禁止や稀少植物の保護、毎年の調査終了後には速やかに埋め戻し、原状を回復するなどの制約があったが、両機関は当館の調査目的に理解を示され、ご協力くださった。記して感謝申しあげたい。

なお、4年間継続した本調査は、平成17年は文化財保護法92条（調査のための発掘に関する届出、指示及び命令）に基づき、指定管理者制度導入後の平成18年以降は同法99条（地方公共団体による発掘の施行）に基づいて行った。また、平成17年には「北の文化・体験スクール」として現地での発掘体験も行った。

平成17年度（第一次発掘調査）：6月18日～7月9日（のべ15日間）
平成18年度（第二次発掘調査）：9月29日～10月15日（のべ13日間）
平成19年度（第三次発掘調査）：6月26日～7月15日（のべ15日間）
平成20年度（第四次発掘調査）：6月26日～7月17日（のべ16日間）

2. 遺跡の立地と自然環境

能取半島東岸の段丘縁辺を北上する道道網走公園線は、岬先端近くになると岬先端へ向かう道路と西側の能取湖畔に出る道路の2本に分かれる。市内から続く一本道沿いには木が生い茂り林の中を通っていくこととなるが、この分岐点を北に折れ岬先端へ向かうとそれまでとうってかわって視界が開けてくる。道路の東側には美岬牧場があり、西側には荒地が広がっている。この荒地はかつて牧場として、また耕作地として利用されたらしい。崖際から約400mの範囲内には立木が1本もないが、開墾される以前は周辺同様に森林で覆われていたのであろう。

能取岬西岸遺跡は、能取岬灯台から西へ直線距離にして約1km離れた段丘縁辺に位置する。かつて畑や草地、放牧地として利用されていた遺跡が存在するあたり一帯は、現在ササで覆われており、道路から遺跡へ向かう間には、キタミフクジュソウ、シコタンキンポウゲ、エゾタンポポ、エゾヒメアマナなどの希少植物もみられる（山田 1998）。当地はかつての森林を伐採し土地を開墾したことで風蝕や波蝕の害を直接被ることとなり、このことが段丘縁辺の崩落を招く一因となったのであろう。土地の崩落は埋蔵されている遺構の崩落にも直結し、徐々にではあろうがしかし確実に海へと流れ落ちているものと思われる。

3. 発掘区の設定と層序

発掘区は、平成8年度の調査成果を踏まえて設定した。すなわち、当時の調査によってオホーツク文化刻文期の竪穴住居址が確認された地点を含む、オホーツク海に注ぐ沢の東側部分を対象に実施した。前調査と同様に、グリッドの南北方向をアルファベット、東西方向を数字で示し、グリッドの名称は各グリッドの北西隅の杭で表示した。グリッドの大きさは5mとした(図1)。

発掘調査は、5m×5mのグリッドを人力で掘り込んでいった。前述のとおり、2号竪穴住居址は厚く土砂で覆われており、地表面から約2mもの深さのところにある。従って、当初は重機を使って掘り込むことも考慮したが、国定公園内に重機を入れることの手続きの煩雑さや希少植物保護の問題等により適わなかった。また、毎年の調査終了時には埋め戻しが要求されたので、調査の進展とともに遺構の概要が見えてくる状況ではなかった。平成17年度はD1グリッドの25㎡を、平成18年度はD2グリッドの25㎡を中心に発掘するというように、毎年1グリッドのみを発掘し最終年度に土嚢を積

んで埋め戻していた以前のグリッドを再度あけ、遺構の全体像を観察し、エレベーションを記録した。

遺構内の基本的な土層の堆積状況は下記のとおりである。

Ⅰ　表土：　小砂利や現代のゴミを多く含んでいる。

Ⅱ　黄褐色土：　小砂利を多く含んでいる。どのグリッドにおいても80cm前後と厚く堆積しているが、南東から北西にむかって堆積量が増している。

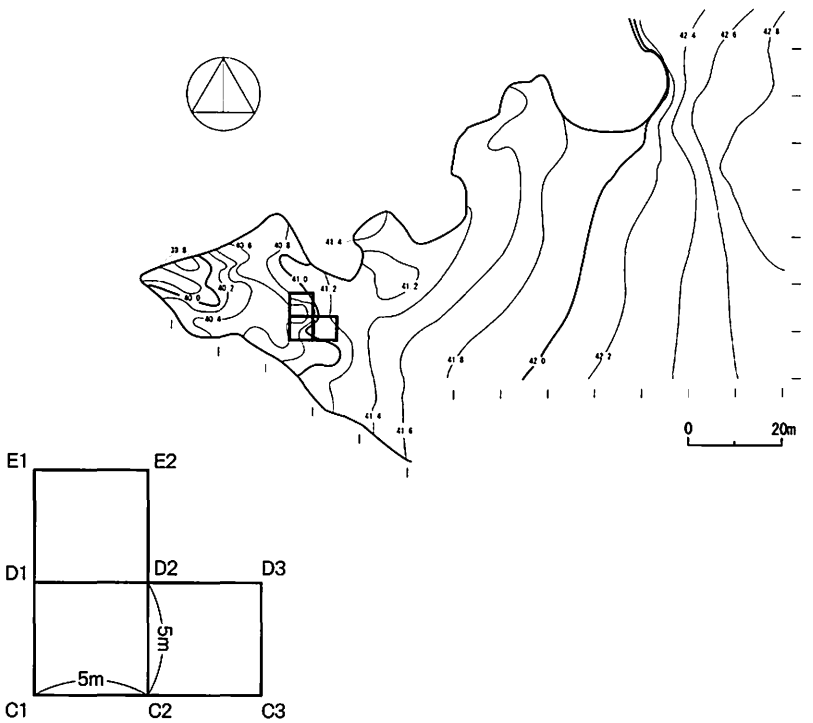
Ⅲ　黄褐色土：　Ⅱ層同様小砂利を多く含んでいる。この層より若干の遺物が出土しはじめる。また、φ5cm以上の礫が多く含まれる。

Ⅳ　黒色土　：　遺物包含層。遺物はオホーツク文化期に属するものを中心に、擦文文化、続縄文文化などの遺物もある程度出土した。また、地点によっては炭化物、炭化材、焼土、骨、ロームブロックが混在あるいは集積していた。焼土は、炭化材の上下から出土している。北西方向に厚く、南東方向に低く堆積している。

Ⅴ　暗褐色土：　しまりが強く、ロームブロックを含む。どのグリッドでも厚さは一定であり、当時の床面に相当すると思われる。遺物は比較的少ない。

Ⅵ　黄褐色土：　いわゆる地山。非常に固い。ⅡからⅤ層の堆積のあり方から、地山は南東から北東へ傾斜していると思われる。

図１　地形図と発掘区



4. 能取岬西岸遺跡2号住居址と出土遺物

遺構

(1) 規模・形状・方向

2号住居址は、現地表面より約2m下で床面に達する（図2)。東側では併行した2条の周溝を検出した。外側の周溝は連続しており、内側の周溝は部分的にとぎれている。これら周溝沿いに建て替えあるいは改築が行われたのであろう。なお、遺構のすぐ南側は沢につながる崖となっていたため、発掘することができなかった。大きさは、周溝の外側の縁を始点とすると長軸（北東-南西方向）で約8m、短軸（北西-南東方向）で約7.8mである。内側の周溝に沿った有効床面積は約37.4㎡である。内側の周溝に沿った住居平面の形状は、短軸と長軸に差がなく、いびつな六角形を呈していると思われる。おそらく外側の住居も同様の形状だったのであろう。

長軸方向は海岸線と平行である。しかし、平成8年度の調査で発見された赤化した粘土貼り床の残骸以外、貼り床が見つかっていないため、貼り床の開口部と閉口部から住居の方向を想定することはできなかった。また、西側周溝際に骨の集積域があり、あるいはこちら側を屋内奥部とした構造だったかも知れないが、骨の集積は「骨塚」と呼べるほどの規模、内容ではないため、骨塚の位置から方向を想定することも困難である。

(2) 新旧関係

2号住居址は、北側で外側の周溝を切って内側の周溝が新たに設けられていること、また炭化材が、北側を除いて内側周溝に伴う形で遺存していたため、外側が古く、内側が新しいと判断した。内側住居の壁は、南東側炭化材列（C２付近）で内側周溝の外側に接していた。断面図をみると、住居を縮小改築する際、あらたに地山を掘り込んで壁を構築している様子が読み取れよう（図4)。壁は約16cmと低く、緩やかである。

外側の壁も一部断面図で確認できた。外側住居も周溝に接するように壁が構築されていたようである。しかし、北側（E1）では周溝から50cm以上外側に離れた地点から丸太を半裁した材の列や柱穴に遺存したままの柱材などが出土しており、北側では、周溝と壁は接していなかったようである（図5)。

(3) 炭化材の出土状況と周溝

炭化材の遺存は4箇所で確認できた（図5・6)。すべての地点で丸太を半裁した材の列が見られた。a－a′、b－b′、d－d′の地点ではφ10cm程度の半裁した丸太材が周溝内部に並べられ、壁に接する形で立てられていたようである。その内側には板状の材が折り重なって遺存しており、壁材、あるいは壁際のベンチ状の遺構と思われる。c－c′を除く炭化材集中域からは、折り重なった材の下から石器や土器片、面取りされた板状の骨等が出土している。なお、図5・6に記された炭化材の番号は、樹種同定を行った材である。

所々とぎれてはいるが、内側の周溝は一周する。幅は10cmから20cm、深さ10cm以内と浅く、北側以外はすべて地山を掘り込んで作られている。北側の周溝は比較的深く、ところによって15cm前後の深さがあり、そこには海獣類等の骨が敷かれたような状態で出土した（図2、図5)。また、北西、北東の周溝付近では、20cmから30cm大の礫が周溝の内側縁にそえられ、また粘土塊が、周溝内部に埋められた状況が認められた。これらの礫や粘土塊によって土留め用の半裁した材をとめるための溝の機能を補強したのであろう。

(4) 床面・炉

床面は火災に遭っているためか、全体に固く締まっていた。コの字型の貼り床は、赤化した残骸がD2区でみられたのみである。レベルから外側住居（旧住居）に伴うものと思われる。内側住居（新住居）では貼り床は認められなかった。中央付近に厚さ10cm以上の焼けてない粘土の塊が散見するだけである。

炉は確認できなかった。掘り込み中にØ5cm大の礫が多く出土することは前述したが、それらはどれも焼けておらず、基本層Ⅲからの出土が中心で、レベルにも違いが有りすぎるため、これらの石の中に炉石として使用された石が含まれているとは考えにくい。また、床面に広がる焼土は周溝付近のみであり、炉が想定される屋内中央部には認められなかった。念のため、地山を深く掘り抜いてみたが、やはり確認できなかったので、炉は無かったと結論している。

(5) ピット・柱穴

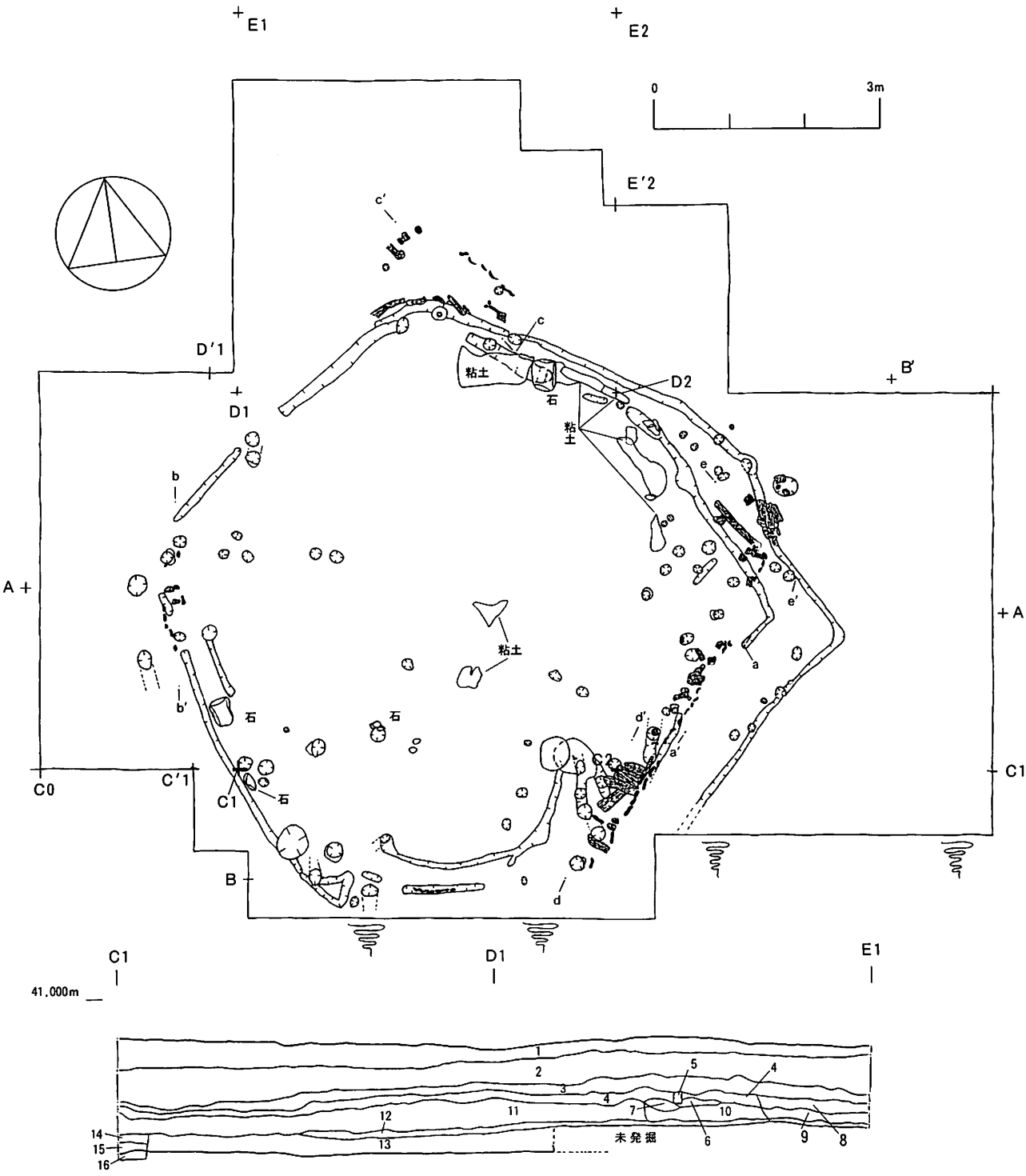
ピットは86点検出した（図7・表1）。ピットは比較的小さく浅いものが多い。最大・最深のピットはNo.55で直径25cm～30cm、深さ46.6cmで、周溝の外側に位置し、柱材が数本遺存していた。数本の材を束にして柱材としていたのであろう。これに相対するNo.83も柱穴と思われるが、これらはともに周溝の外、すなわち住居の外側の柱材と考えられる。

ピットは北側に少なく、残り3方向に散らばっており、比較的大きいかあるいは深いピットを柱穴としてとらえても、それらに規則性はみられないようである。なお当遺構にはピットの縁に粘土を巻いて、あるいは石を配置したものがある（No.8、No.10、No.11、No.20、No.31、No.43、No.46、No.70、No.82）。ピットは非常に固い地山を掘り抜いて作られており、これら粘土や石はそこにはめ込む柱材の固定を補助するためのものであろうか。

また傾斜したピットも多く見受けられた。ピットが屋内方向に傾斜しているもの（No.5、No.22、No.25、No.29。これが柱穴であれば柱材は屋外方向に伸びることになる。）や屋外方向に傾斜しているもの（No.7、No.12、No.86）がある。屋内方向に傾斜しているピットは梯子孔であろうか。傾斜しているピットは、その方向を問わず、南側に集中しているようである。

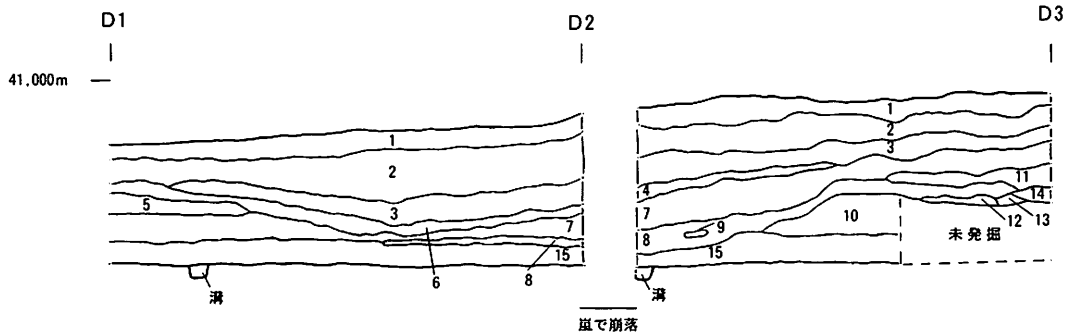
(6) 骨塚

骨の集中箇所は、北側、西側、南側に3箇所認められた。どれも規模が小さく、骨の種類も少ない。「骨塚」と呼べるほどのものか、疑問が残る。詳細については、後述する分析結果を参照のこと。

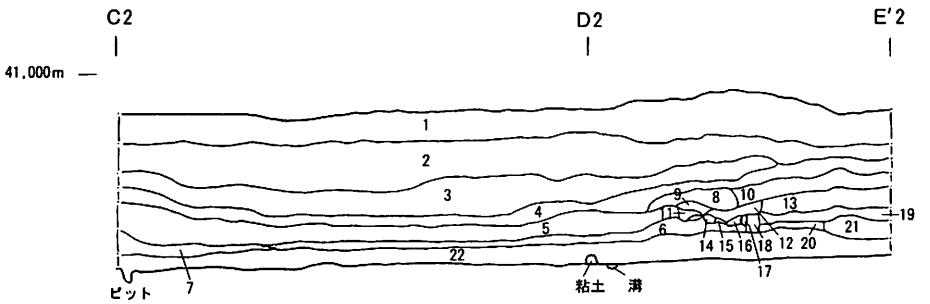


1 表土
2 黄褐色土
3 黄褐色土（φ5cm以上の礫が混じる）
4 茶褐色土
5 暗褐色土（小砂利が混じる）
6 暗褐色土
7 明褐色土（炭化物、ロームブロックが混じる）
8 暗褐色土（骨、小砂利が混じる）
9 明褐色土
10 暗褐色土
11 黒色土（炭化物を多く含む）
12 明褐色土
13 暗褐色土
14 黒色土（焼土を多く含む）
15 焼土
16 黒色土（炭化材出土。ピットに対応）

図２　２号竪穴住居址平面図（1）・断面図（1）



1 表土
2 黄褐色土
3 黄褐色土（小砂利、φ5cm以上の礫が混じる）
4 黒褐色土
5 黄褐色土
6 黄褐色土（炭化物が混じる）
7 黒色土（遺物を多く含む）
8 黒色土（炭化物を多く含む）
9 焼土
10 暗褐色土
11 黒色土
12 暗褐色土（ロームブロックが混じる）
13 暗褐色土
14 黒色土
15 暗褐色土



1 表土
2 黄褐色土
3 黄褐色土（小砂利、φ5cm以上の礫が混じる）
4 黄褐色土（小砂利、φ5cm以上の礫、炭化物が混じる）
5 黒色土（遺物を多く含む）
6 黒色土（遺物、炭化物を多く含む）
7 黒色土
8 暗褐色土
9 暗褐色土（炭化物が混じる）
10 黄褐色土（ロームブロック、小砂利が混じる）
11 黒色土
12 黄褐色土
13 黄褐色土（固く締まっている）
14 黒色土（炭化材、焼土を多く含む）
15 黒色土層（14より締まっている）
16 暗褐色土（炭化物が多く混じる）
17 黄褐色土
18 黄褐色土（固く締まっている）
19 黒色土
20 黄褐色土（ロームブロックが混じる）
21 黄褐色土
22 暗褐色土

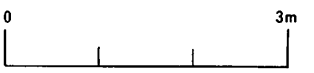
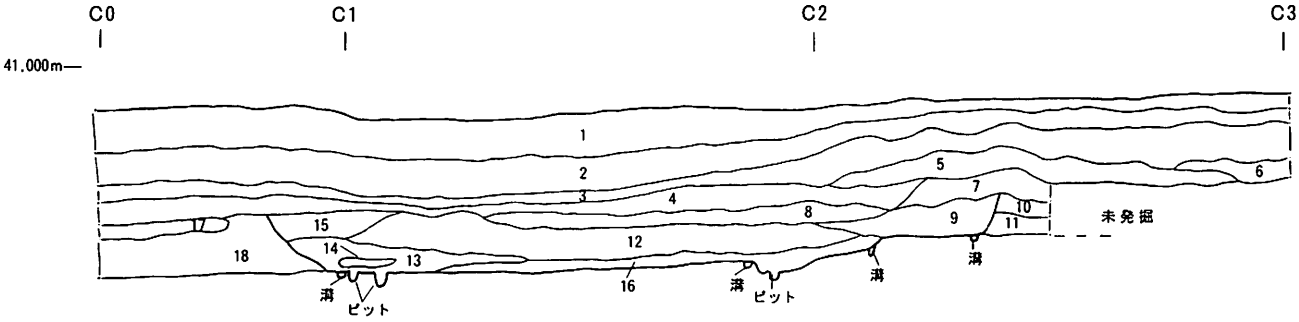
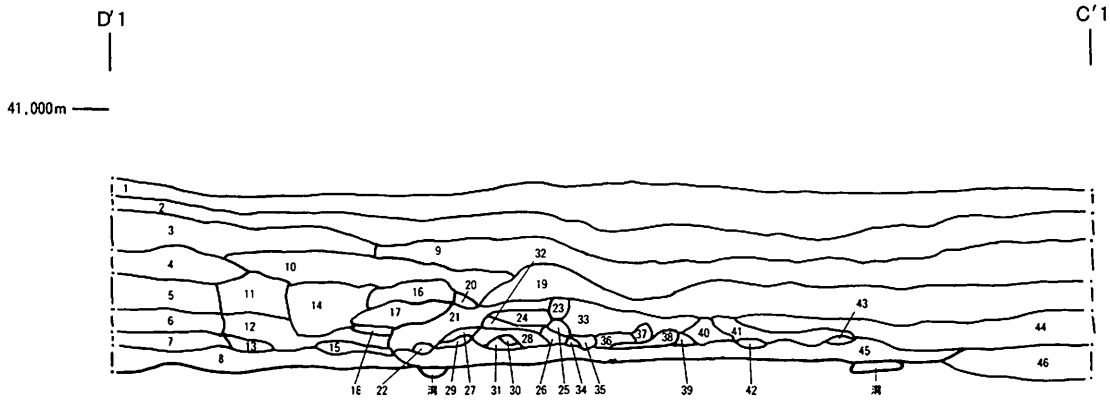


図3　断面図（2）



1 表土
2 黄褐色土
3 黄褐色土（小砂利、φ5cm以上の礫が混じる）
4 黄褐色土（小砂利、φ5cm以上の礫、炭化物が混じる）
5 黒色土
6 黒色土（小砂利が混じる）
7 暗褐色土
8 黒色土（遺物を多く含む）
9 暗褐色土（地山を掘り込んだ周溝の一部を検出）
10 暗褐色土（固く締まっている）
11 暗褐色土
12 黒色土（遺物、炭化物を多く含む）
13 黒色土（炭化物を多く含む）
14 焼土
15 黄褐色土（骨が混じる）
16 暗褐色土
17 黒色土
18 暗褐色土（ガチガチに締まっている）

0 3m



1 黄褐色土
2 黄褐色土（黒色土が混じる）
3 黄褐色土
4 黄褐色土（焼けていない骨を多く含む）
5 黒色土（固く締まっている）
6 黒色土（固く締まっている。ロームブロックが混じる）
7 黄褐色土（炭化物が混じる）
8 暗褐色土
9 黄褐色土
10 黄褐色土（骨、炭化物が混じる）
11 暗褐色土
12 暗褐色土（骨が混じる）
13 黄褐色土（炭化物が混じる）
14 黄褐色土
15 黄褐色土（炭化物が混じる）
16 暗褐色土（骨が混じる）
17 暗褐色土（骨を多く含む）
18 暗褐色土
19 黄褐色土（骨が混じる）
20 黄褐色土（炭化物が混じる）
21 黒色土（骨が混じり、遺物を多く含む）
22 黒色土（炭化材を含む）
23 黒色土（炭化物が混じる）
24 黒色土（炭化物、骨が混じる）
25 黒色土（炭化物が混じる）
26 焼土
27 焼土
28 暗褐色土
29 黒色土（炭化材を含む）
30 焼土
31 暗褐色土（炭化材を含む）
32 暗褐色土
33 暗褐色土（炭化物を多く含む）
34 暗褐色土（炭化物を多く含む）
35 暗褐色土
36 焼土
37 焼土
38 黒色土（炭化材を含む）
39 黒色土
40 焼土
41 暗褐色土
42 黒色土（炭化材を含む）
43 黒色土（炭化材を含む）
44 黒色土（C0-C1-C2-C3ラインの17に対応）
45 暗褐色土
46 暗褐色土（C0-C1-C2-C3ラインの18に対応）

0 3m

図4　断面図（3）

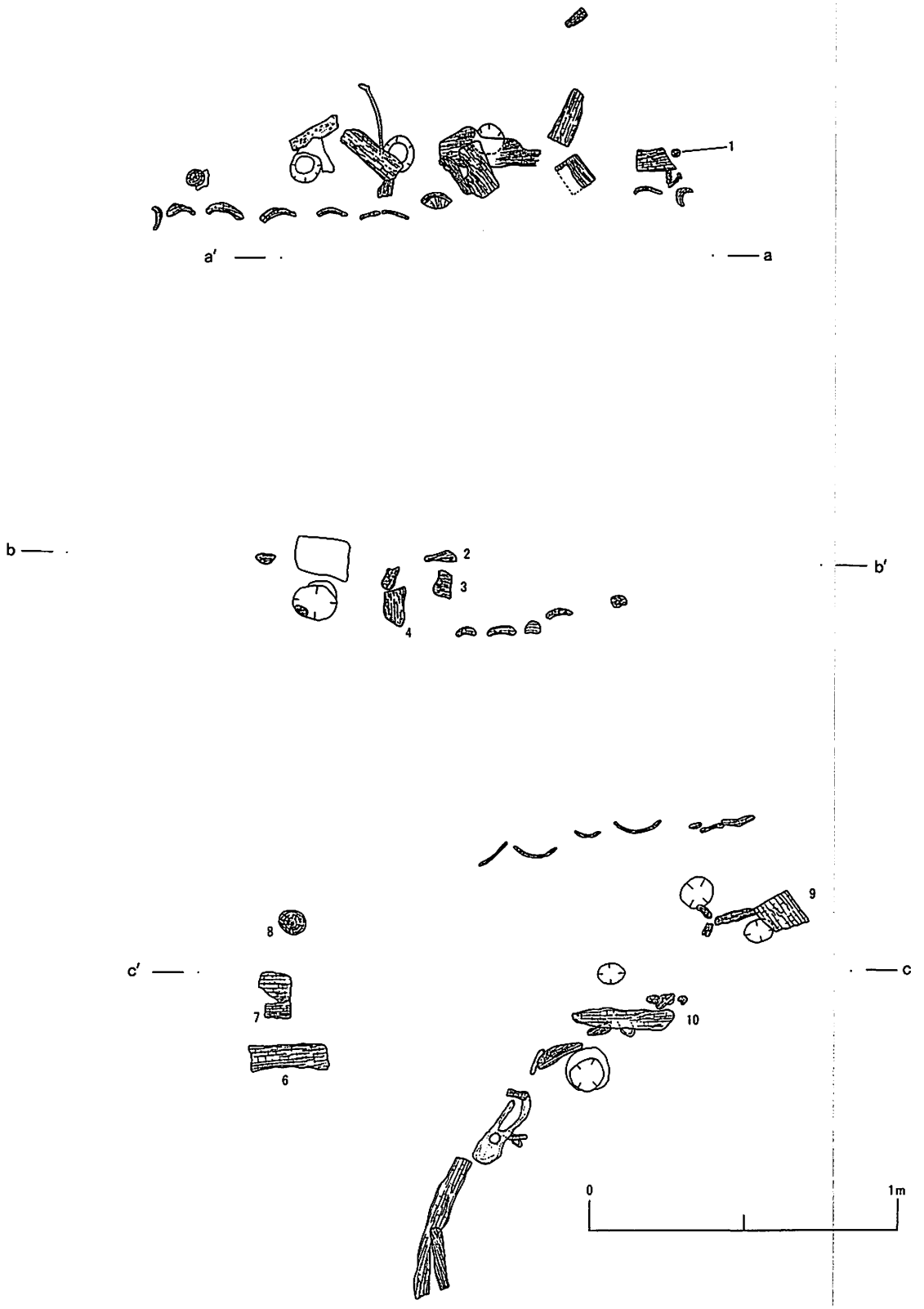


図５　炭化材出土状況（1）〈番号は樹種同定の資料番号〉

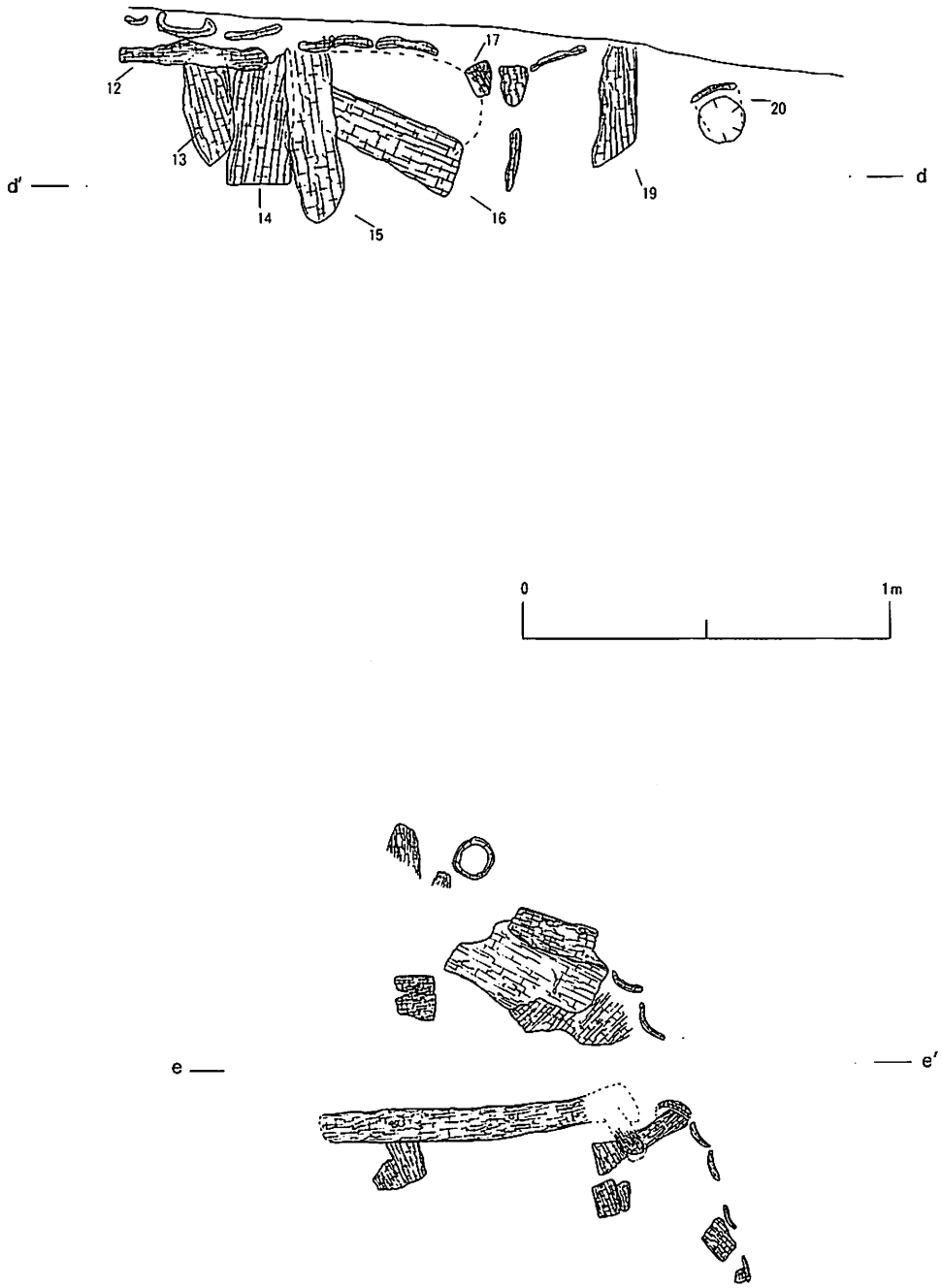


図６　炭化材出土状況（2）〈番号は樹種同定の資料番号〉

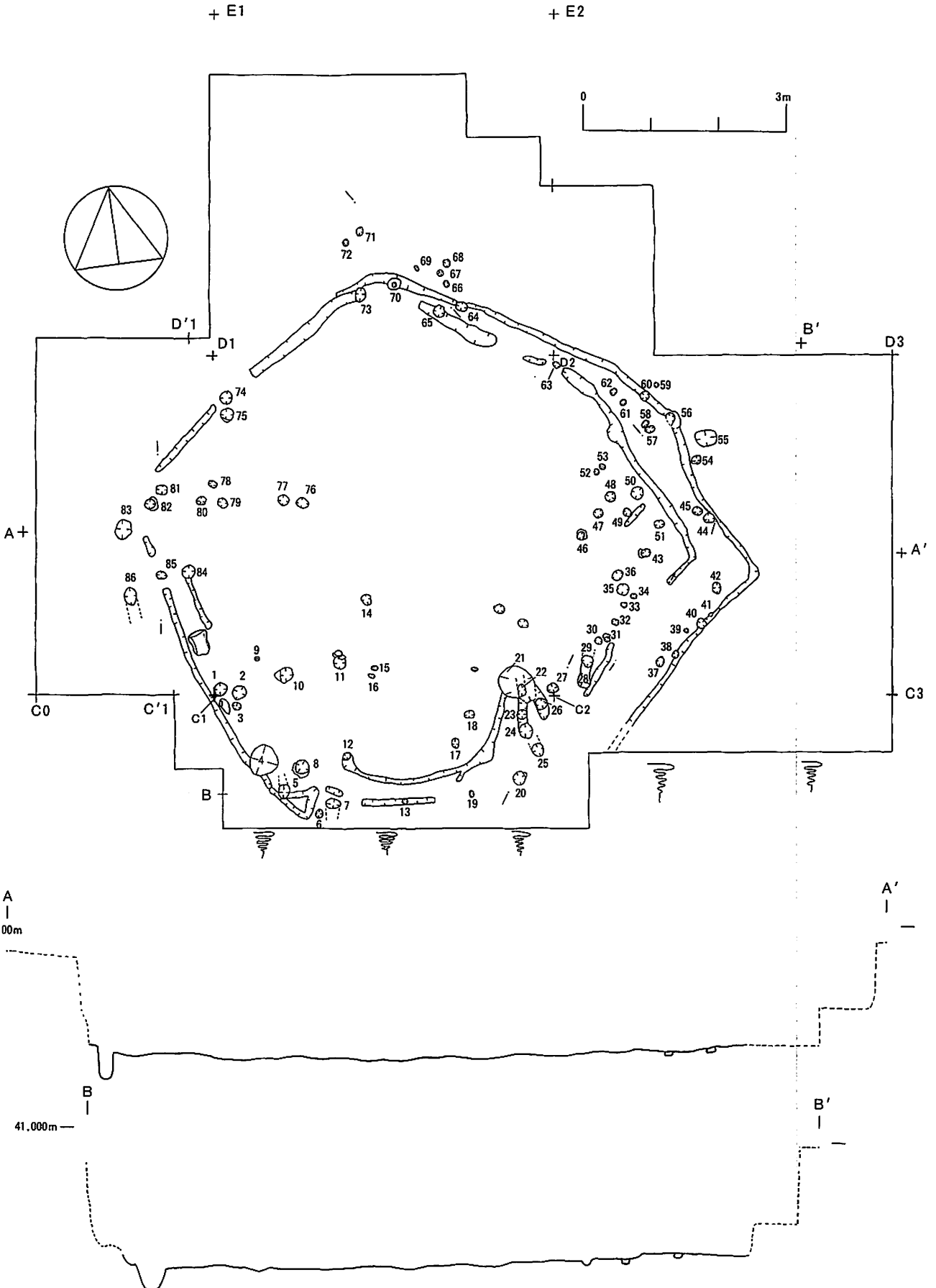


図７　２号竪穴住居址平面図（2）

表1　ピット一覧

No.	規模／深さ(cm)	備考
1	20×18／11	
2	21×20／19	
3	13×12／22	
4	47×42／32.5	
5	20×15／51.5	北(屋内方向)に傾斜。
6	14×11／3.5	
7	24×17／17	南(屋外方向)に傾斜。
8	20×20／17	南側の縁に沿って粘土が巻かれている。
9	8×8／4.5	
10	24×20／2.1	西側の縁に沿って粘土が巻かれている。
11	20×19／12.5	北側の縁に10cm前後の3個の石がある。
12	16×11／5.4	南西(屋外方向)へ傾斜。
13	10×7／5.5	
14	15×15／11	
15	11×7／8.5	
16	11×7／1.4	
17	15×11／6	
18	7×6／14.5	
19	10×8／10	
20	20×19／23	東側の縁に沿って粘土が巻かれている。
21	54×47／15	pit内に4個のpitがある(No.22～24・26)。西側半分を粘土が覆っていた。
22	20×11／9.5	北(屋内方向)へ傾斜。
23	16×15／19	
24	21×20／15	
25	19×16／8.5	北(屋内方向)へ傾斜。
26	21×18／5.3	
27	8×8／13	
28	25×20／44.9	
29	17×17／46.4	北(屋内方向)へ傾斜。
30	11×9／36.2	
31	10×10／18	北側の縁に沿って粘土が巻かれている。
32	10×9／28	
33	10×9／17.1	
34	10×7／5	
35	20×17／22.4	
36	18×16／21.8	
37	16×13／19	
38	11×11／34	
39	8×6／12	
40	15×15／2.7	
41	7×6／2.4	
42	17×12／13	
43	15×12／12.6	西側の縁に沿って粘土が巻かれている。
44	15×14／3.5	
45	19×13／16	
46	13×10／14.1	北側の縁に沿って粘土が巻かれている。
47	15×15／6.5	
48	15×15／5.5	
49	15×12／8.6	
50	20×17／25	
51	14×13／12	
52	10×9／22	
53	10×7／6	
54	16×14／18	
55	30×25／46.6	
56	30×20／30.2	
57	17×11／18.5	
58	9×9／20	
59	8×7／19.8	
60	14×12／23	
61	9×9／20	
62	10×8／17	
63	10×8／1.3	
64	17×13／44.7	
65	17×17／7	
66	10×8／34.3	
67	11×10／35.9	
68	12×10／23.8	
69	9×7／33.3	
70	11×11／11	縁全体に粘土が巻かれている。
71	9×8／45.1	
72	11×10／23.9	
73	15×14／15.5	
74	20×20／27.5	
75	20×20／10	
76	20×15／31.8	
77	17×15／31.3	
78	13×11／24.1	
79	17×14／25.2	
80	14×14／26.4	
81	14×14／20.5	
82	16×16／39	東側の縁に粘土が巻かれている。
83	29×24／40.5	
84	20×20／26.7	
85	16×12／24.6	
86	26×19／58.5	南(屋外方向)に傾斜。

遺物

(1) 土器（図8～14／図面4、5）

土器片は約1,800点出土した。その中には縄文を持つ土器片や擦文を持つ土器片も含まれるが、大半はオホーツク文化の土器片であった。刻文を中心に、櫛歯文や沈線文、無文、貼付文土器片が出土した。刻文には、横走するものやハの字形のものなど基本的な文様と、爪形文や円形型押し文、貼付文等を組み合わせたものも多く見られた。ここでは、それらのいくつかを取り上げる。

図8は床面出土の土器片と底部である。1は　ボタン状の貼付文が押しつけられ、その下部に粘土紐が施文された胴部破片。粘土紐は本来複数段施文されていたようである。2は肥厚帯上に横走する刻文が、頸部下に円形の型押し文が施文されている。3は0.7cmほどの平らな口唇が外反した沈線文土器。肥厚帯は見られない。沈線文の上下に刻文が施文され、沈線文下部では一定の間隔で刻文が施文されている。4も口唇が平らで外反している。肥厚帯下部にはハの字形の刻文を持ち、指あるいは円形の施文具により幅広の沈線を2段施文し、その間の凸部にも刻文を施文している。胴部には擬縄貼付文が施文されている。比較的大型の甕形土器と思われる。

図9-1は口唇が溝状に凹んでいる。肥厚帯はなく、5本の櫛歯を持つ施文具によって、山形に2列櫛歯文が施文されている。また胴上部にも横方向に同文様が施されている。内外全体に炭化物が付着している。床面出土。2は口唇がやや丸みを帯び、肥厚帯下部に3本櫛歯の施文具で櫛歯文が横方向に施文されている。肥厚帯全面が黒色で光沢を持っている。3の口唇は平らで、口縁肥厚帯上に5～6本櫛歯の施文具で斜めに施文されている。また口縁部肥厚帯と頸部との段差が明瞭に認められる。内外面に若干の炭化物が付着。胴部の張出は弱いようである。西側の骨集中域より出土。4,5には肥厚帯下部に円形型押し文が施されている。4は円形の先の平らな施文具によって、5は先の丸い施文具によって施文されている。6の口唇は山形で、肥厚帯に爪形文をもつ。内外面に炭化物が多く付着している。北側の骨集中域より出土。7は口唇が山形で外反する。肥厚帯下部と胴部の爪形文の間に、円形型押し文が施されている。炭化物が内外全面に付着した比較的小型の甕形土器である。北側の骨集中域より出土。8は口縁部に4本櫛歯の施文具で櫛歯文を横方向に施文されている。約1.5cmの無文帯の下部に、紐を指でひねるようにして波状にした貼付文が施文される。貼付文上および土器内面に炭化物が厚く付着している。9の口唇は山形で外反している。肥厚帯下部には、器面を指でひねるようにして刻文を施文しているようであるが、施文方向に乱れがあるように見える。北側の骨集中域から出土。10の口唇は平らで、さほど厚くはないが幅広い肥厚帯下部に刻文が横走する。肥厚帯と頸部との段差は明瞭。北側の骨集積域から出土。11は丸みをもつ口唇直下に斜めの短刻文が、肥厚帯下部に横走する刻文が施文されている。12の口唇は山形で、肥厚帯は発達していない。頸部が狭く胴部の張出が大きい。小形の壺形土器と思われる。炭化物は内面に集中して付着している。西側骨集中域より出土。

図10-1の口唇は平らで１cmの幅を持つ。3.5cmの幅広い肥厚帯上下部に横走する刻文が施文されている。肥厚帯から頸部にかけての凹み部分に炭化物が付着している。西側の骨集中域より出土。2の口唇は平らで、肥厚帯に横走する刻文とハの字形の刻文が上下に施文されている。各刻文の長さには違いが見られ、同一の施文具で施文されたのではないようである。頸部に炭化物の付着が集中している。西側骨集中域より出土。3の口唇はやや丸みを帯びている。幅広い肥厚帯の上部が山形に突出し、そこに斜めの刻文が約1.5cm間隔で施文されている。肥厚帯下部にも刻文が施文されているが、施文具は異なるようである。中規模の甕形土器片と思われる。外側は肥厚帯から頸部にかけて、内側は全体的に炭化物が付着している。北側の骨集中域より出土。

4は肥厚帯両端に斜めの刻文、中央部に横走する刻文が施文され、5は肥厚帯両端に施文されている。

6はさほど厚くない肥厚帯に2列併行して横走する刻文が施文され、その下に縦走する刻文が施文されている。壁清掃時に出土。7は肥厚帯の両端、中央部に施文方向の異なる三種類の刻文を持つ。内外面に炭化物が大量に付着していた。8は頸部に刻文を施文、9は肥厚帯下部に縦に長い刻文を施文している。10の口唇は平らで、外反している。肥厚帯上部に横走する刻文、下部には短刻文とハの字形の刻文が同列に横走している。11は平らな口唇が外反する。肥厚帯下部に深く斜刻文が施文されている。内側は炭化物が層となって大量に付着している。

図11-1は肥厚帯に横走する刻文とハの字形刻文が施されているが、配列が乱れている。頸部に集中して炭化物が付着している。

口唇が丸みを帯びた2は肥厚帯下部にハの字形の刻文が、口唇が平らな3は肥厚帯に横走する刻文とハの字形刻文を上下に施文している。2、3ともに炭化物が厚く付着している。4の口唇は平たく、肥厚帯は発達していない。口縁部に2列の刻文が施文され、その下部に爪形文が施文されている。5の口唇は平らで肥厚帯下部に横走する刻文が施文。胴部の張出から見て、壺形土器と思われる。焼土の上部から出土した。6は2列に並んだハの字形の刻文と先端が円形の施文具で施文された円形型押し文を多用した胴部片。貫通孔を持つ把手状の突起が付いている。

図12-1は外反する口唇を持つ。肥厚帯はあまり厚くないようである。口縁部に横走する刻文、肥厚帯下部に、紐を指でひねるようにして波状にした横走する貼付文が施文される。外側全面に炭化物が付着している。2は横走する3本の沈線文と爪形文をもつ胴部破片。3は無文で、内外面に炭化物が付着している。特に内側は層になるほど厚く付着している。沈線文系の土器と思われる。4の口唇は平らで外縁に指でひねるようにして波状にした文様が施文されている。肥厚帯下部の2本の沈線文間には、櫛歯状の施文具によって櫛歯文が施文され、2本の沈線の外側には先端が平坦な施文具によって円形型押し文が施されている。これらは沈線を挟んで相対している。頸部下端にも数本歯の櫛歯状施文具によって施文されている。沈線文系の土器。5は口唇が平らで肥厚帯を持たない無文土器。6も無文で、頸部の湾曲の割には胴部の張出が緩やかにみえる。小形の壺形土器と思われる。口縁部内外に炭化物が多く付着していた。7は肥厚帯中央部に浅い斜刻文が横走する。口唇の平らな8は肥厚帯下部が突出し、稜線が明瞭である。稜線はその前後の箇所を横方向に摩擦を加えることで発達したと思われる。図9は口唇が山形で、肥厚帯下部に3つの浅く小さな孔がある。各孔の施文具は異なっており、その並びに規則性もないようで確実に施文とは言い切れない。ここでは無文の壺形土器とする。北側炭化材の下から出土。10は2条の擬縄貼付文と、ボタン状の貼付文が施文された胴部破片。北側の骨集中域より出土。

図13-1の口唇は山形で肥厚帯の両端に、押しつけたような貼付文が施文されている。2は山形の口唇直下に擬縄貼付文を、肥厚帯下部にも粘土紐が施文されている。3はハの字形の2列の刻文の間に、横走する2列の刻文を挟んだ胴部破片。内外面に炭化物が多く付着している。西側骨集中域より出土。4は横走する刻文の間に、先端の平らな3から5本の櫛歯を持つ複数の工具によって、斜めに櫛歯文を施文した胴部破片。上下の刻文は相対せず、ずらして施文されている。西側骨集中域より出土。5は横走する刻文の間に先端が丸い4本の櫛歯をもつ施文具によって縦に櫛歯文を施文した胴部破片。6は1本の粘土紐に指でひねりを加えた貼付文の胴部破片。北側骨集中域から出土。7は擬縄貼付文をもつ胴部破片。北側炭化材の下から出土。図14は埋土出土の土器底部。

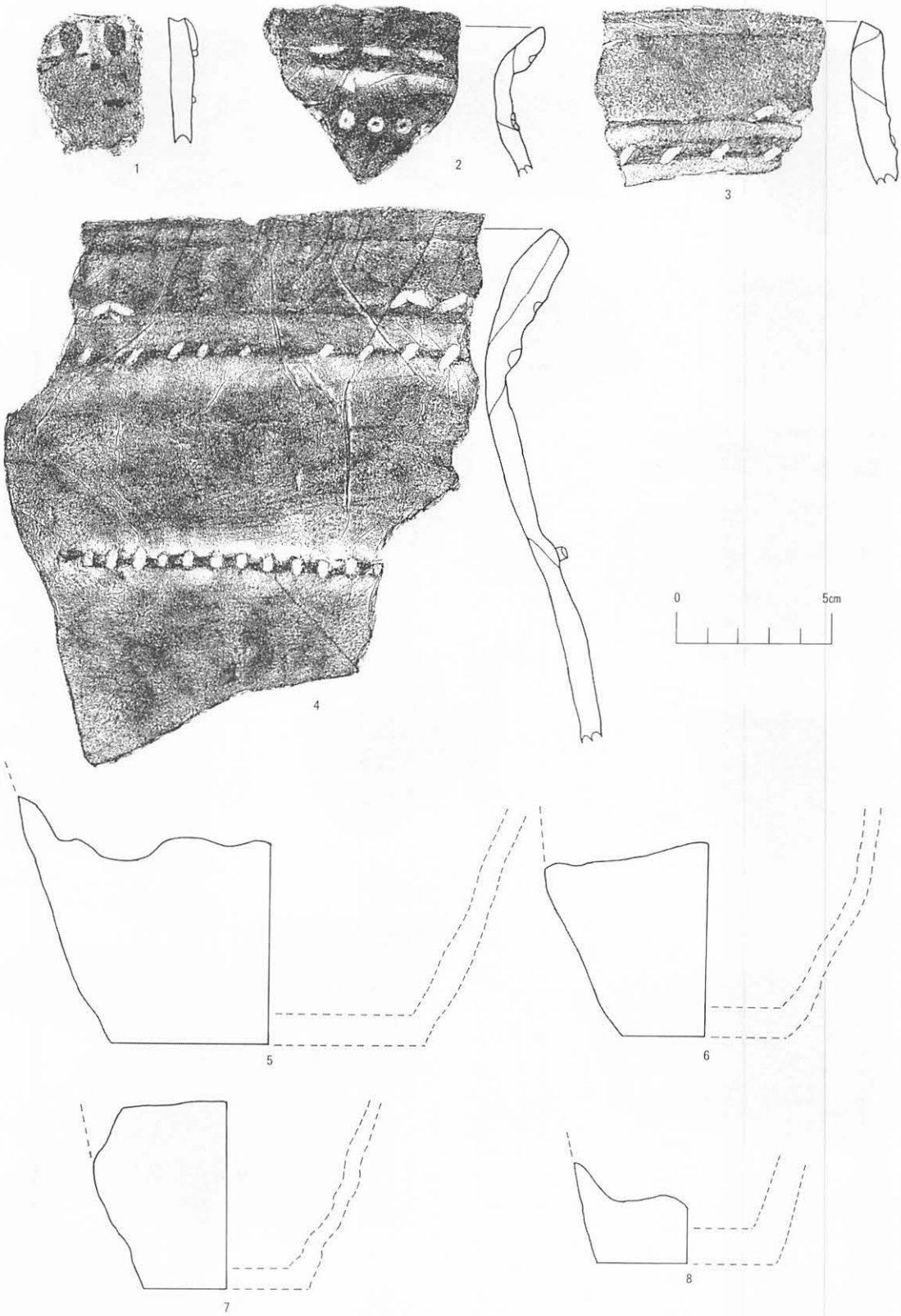


図８　床面出土土器

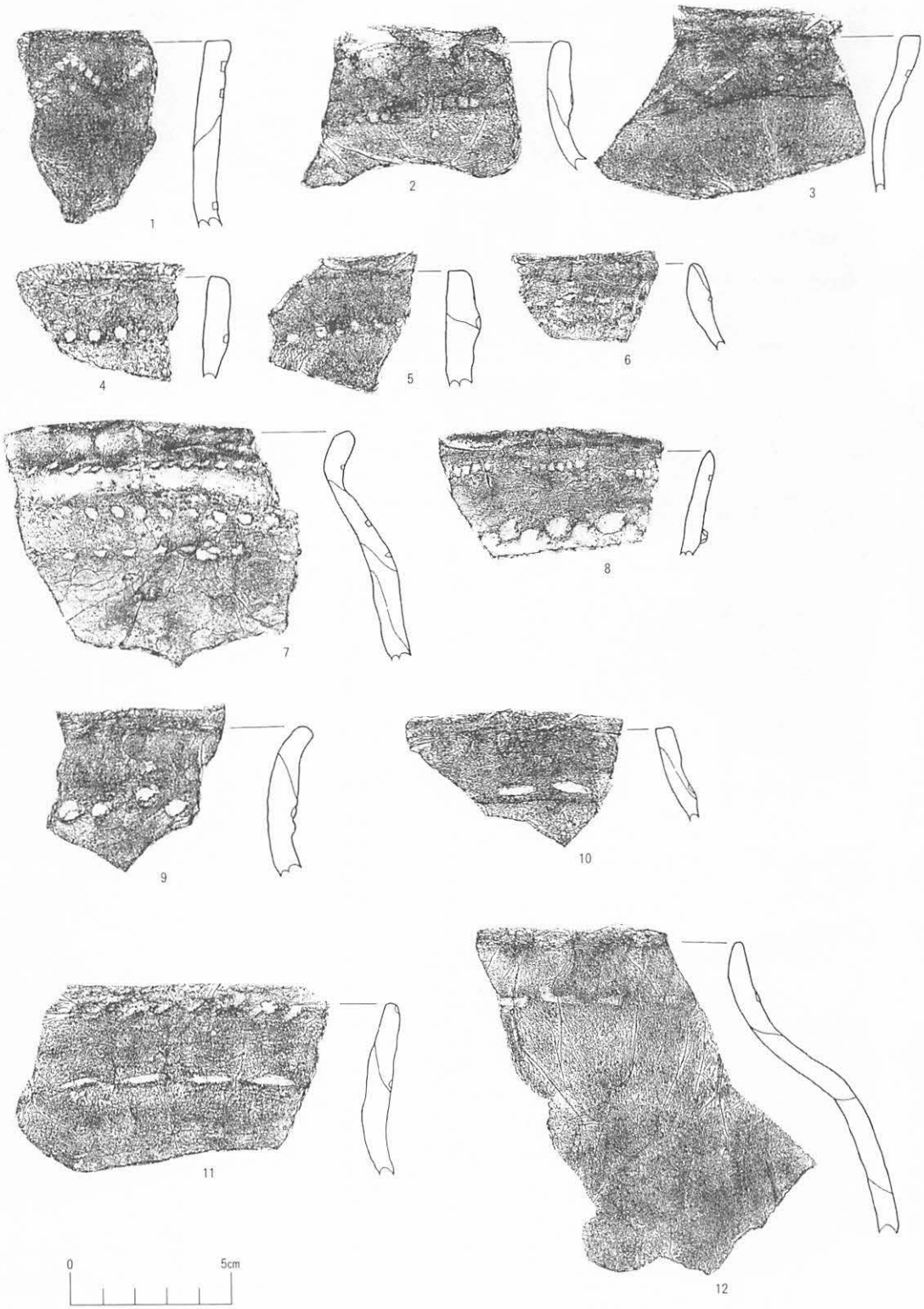


図９　埋土出土土器（1）

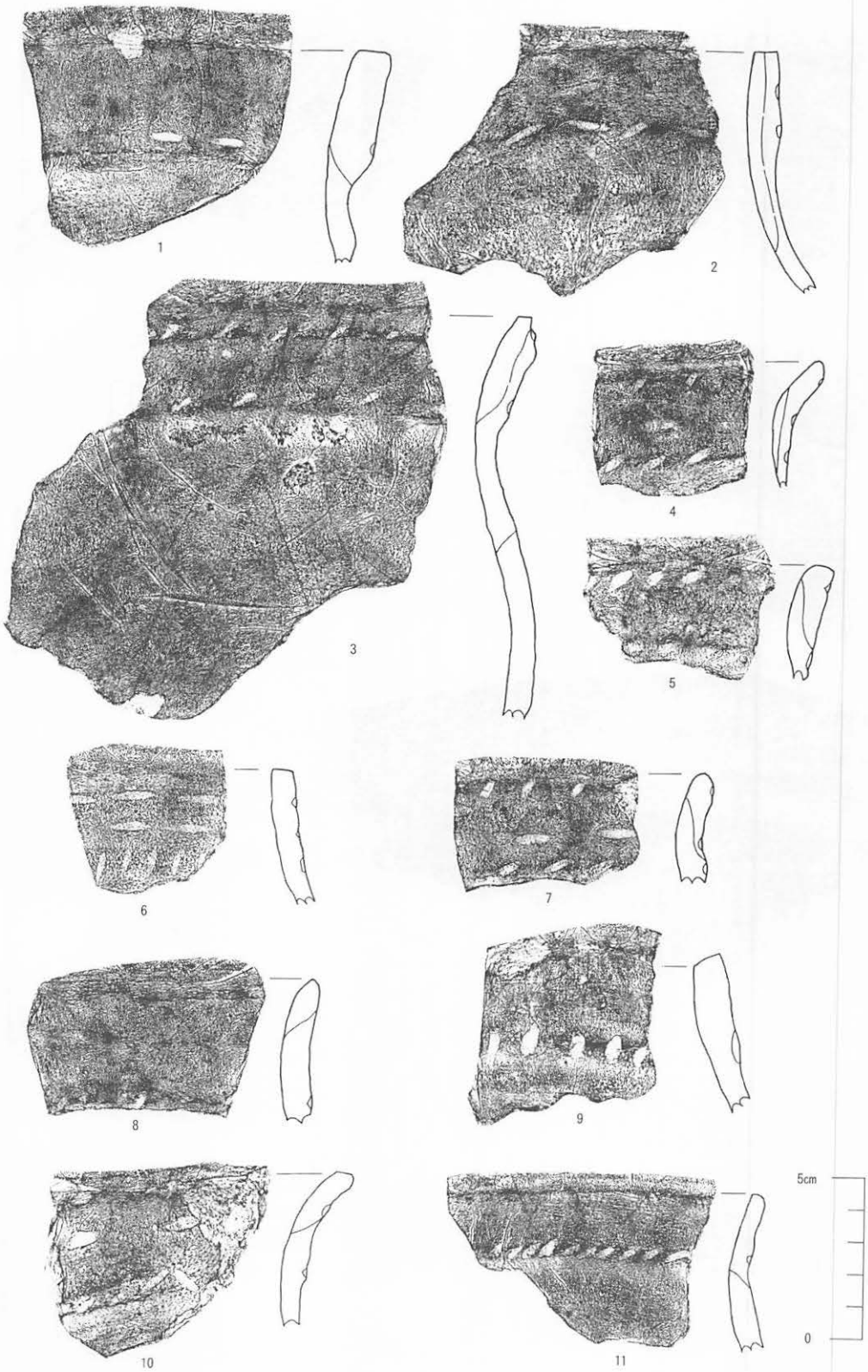


図10　埋土出土土器（2）

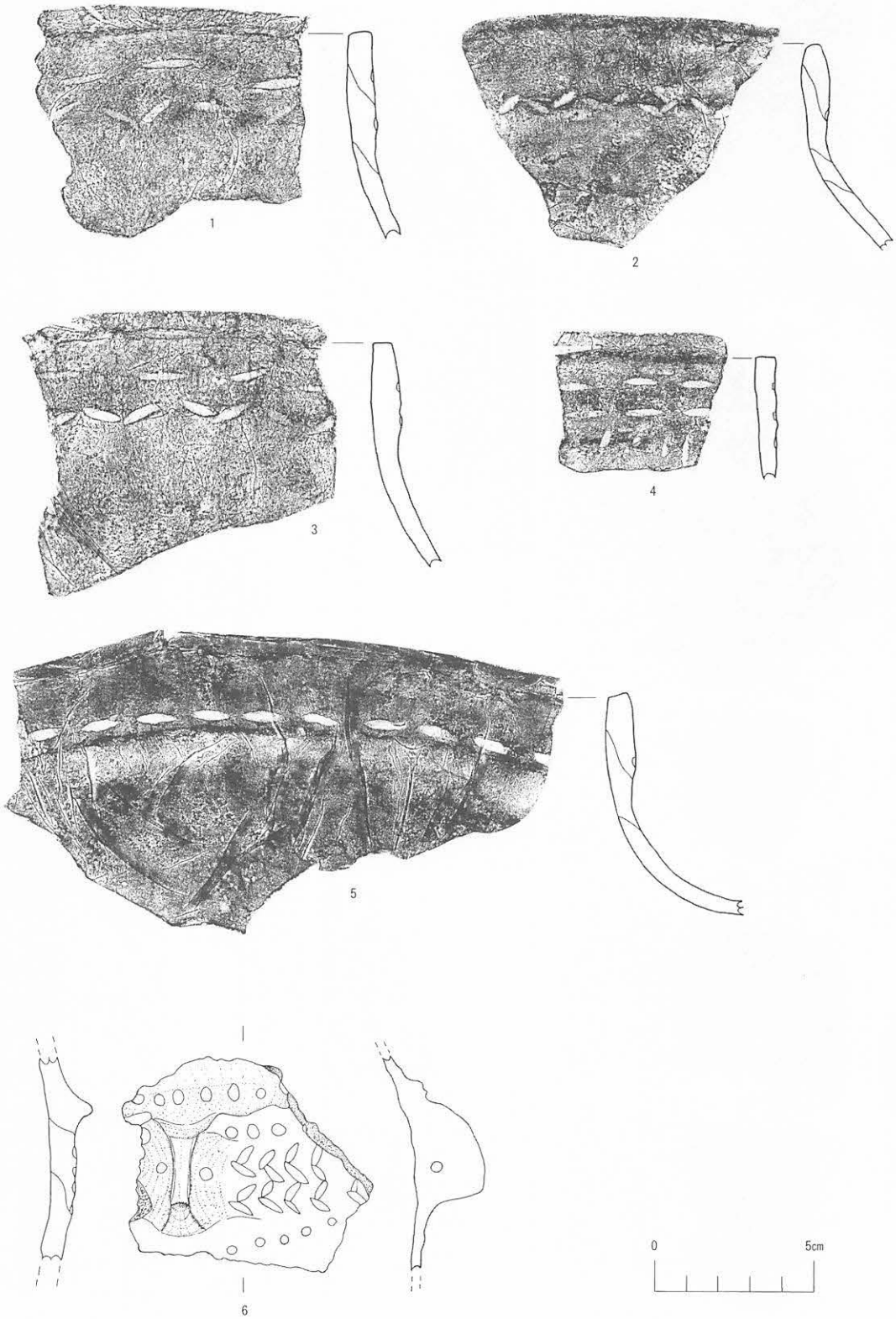


図11　埋土出土土器（3）

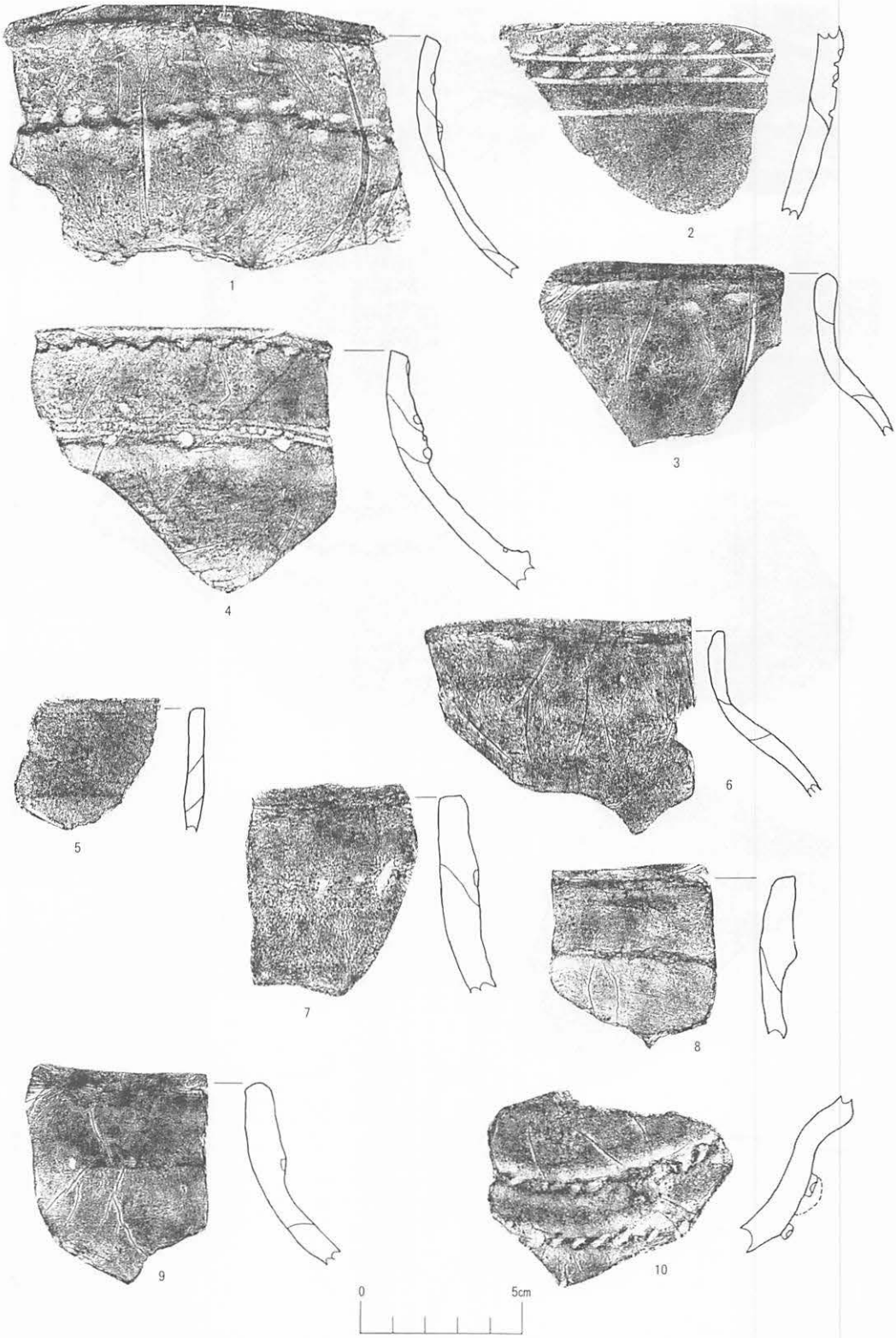


図12　埋土出土土器（4）

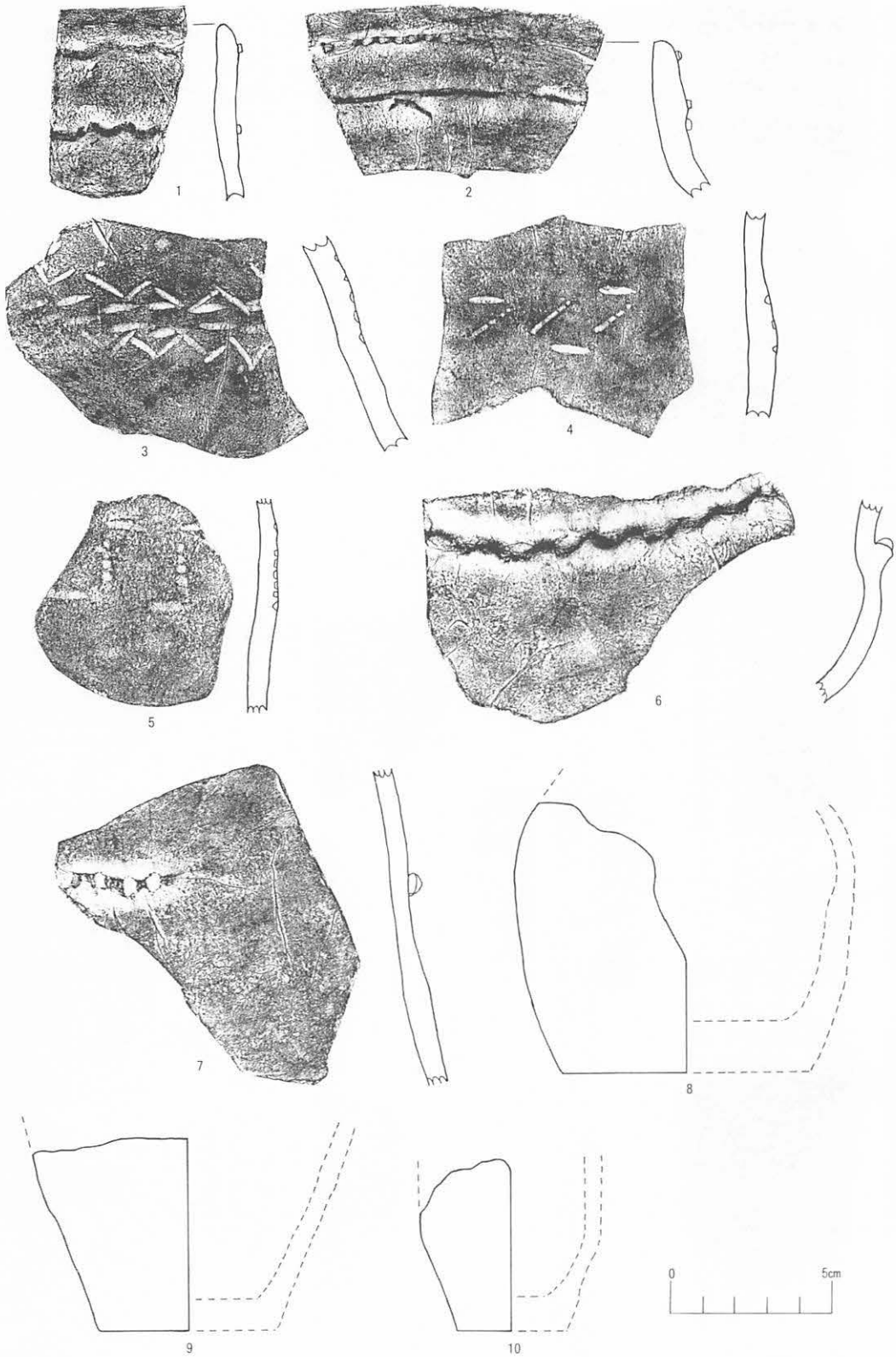


図13　埋土出土土器（5）

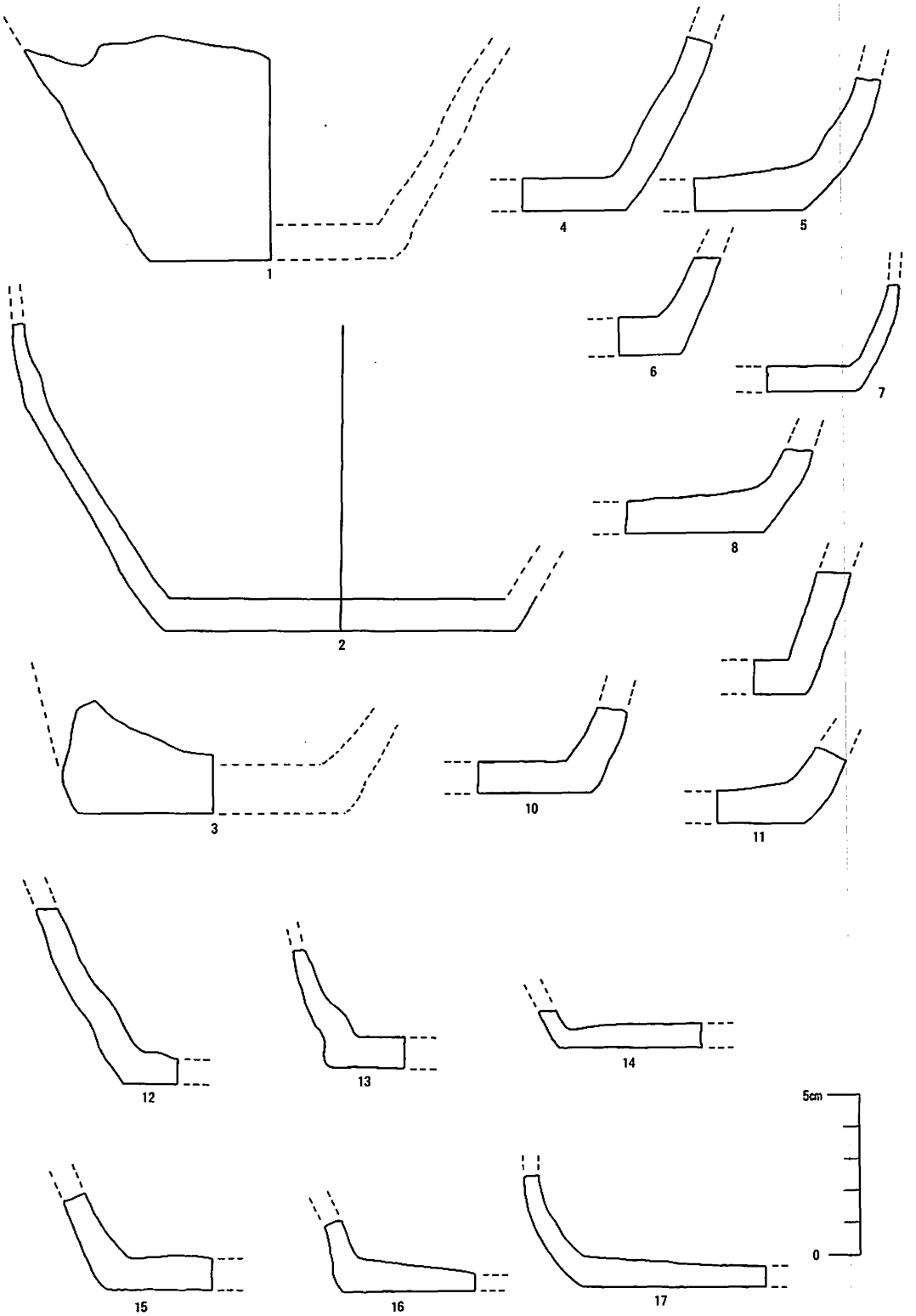


図14　土器底部

(2) 石器・骨角器（図15～21／図版6）

石製遺物は約2,700点出土しているが、石器の製作工程で残る石核の残骸や剥片（残滓）が大半で、石器製品は少ないと考える。本遺構からは石鏃や石槍、削器等がわずかに出土しているのみであった。また骨角器類もわずかである。ここに可能な限り図化し、表にまとめた。表中の計測値は、各石器の最大の数値である。なお特にことわりのない石器の材質は黒曜石である。

図15-1から22は床面から出土した石鏃である。2は凝灰岩、6は頁岩製。14,22は焼けて赤化した貼り床残骸の下から、21は柱穴内から出土した。23、24は石槍の基部とした。床面出土。25から29、図16-1は削器とした。27は裏面に原石面を残し、29も一部原石面を残している。すべて床面出土。図15-30はラウンドスクレーパーで、先の石鏃と同様、貼り床残骸の下から出土した。図16-2は泥岩製の石斧。3は堆積岩製である。表面が所々オレンジ色で、このような石はモヨロ貝塚でも多く見られるという（米村衛氏のご教示による）。用途は不明だが、巾が広い方の先端がつぶれており、すりつぶす、あるいは叩く用途があったかもしれない。4は安山岩製。直径約3cm、深さ約2cmの孔があいている。まばらに煤がついており、火を受けたようだ。自然石の可能性もあるが、ここでは異形石器としてとらえておく。5は緑泥片岩の叩き石で、使用痕がみられる。重さ690g。床面出土。6はラウンドスクレーパー、7は泥岩製の石斧で、図17-1は砂岩製の砥石、2は緑泥片岩の石斧である。ともに骨集中域の下層から出土した。図17-1は4面が面取りされている。また先端部分がつぶれており、形状からして斧としての使用法もあったかもしれない。2は緑泥片岩の石斧。骨集中域の下層から出土。3は緑泥片岩製。貼り床残骸の下から出土した。全面に粘土が付着している。側面には溝が走っているが、短軸方向の一部でとぎれている。この溝状の痕跡が人工的なものか、石の変成作用によるものかはわからない。ここでは異形石器としておく。4は石槍の先端部破片、5は石鏃破片とした。7、8、9は削器。4、6、8、9は炭化材が出土する面の直上から、5、7は炭化材の下の周溝内から出土した。図17-10から図18-16は埋土出土の石鏃である。図17-15は炭化材集中域から出土した。図17-21、22は頁岩、図18-1は凝灰岩、図18-13は緑泥片岩、図18-17は安山岩製である。図17-20、図18-10、12は火を受けており、特に10は発泡し湾曲している。図18-17から24は石槍とした。17、18は安山岩製。埋土出土。図18-25から図19-12は削器、図19-13から図20-5はラウンドスクレーパー。6は緑泥片岩、8は泥岩、9は安山岩製の石斧である。7は裏に原石面を残したラウンドスクレーパー。図20-10、図21-1は有孔石器。首飾りなどの装飾品であろうか。2は砂岩製の砥石。全面が面取りされている。短軸上の片端には半円状の凹みがある。携帯用の砥石であろう。図21-3は骨斧、4は銛先でともに鯨骨製。5は鳥管骨製の針入れ。土圧のためか、中央部分がつぶれている。╳の形を一単位とした線刻模様をもつ。3、4、5の骨角器はいずれも焼けていない。

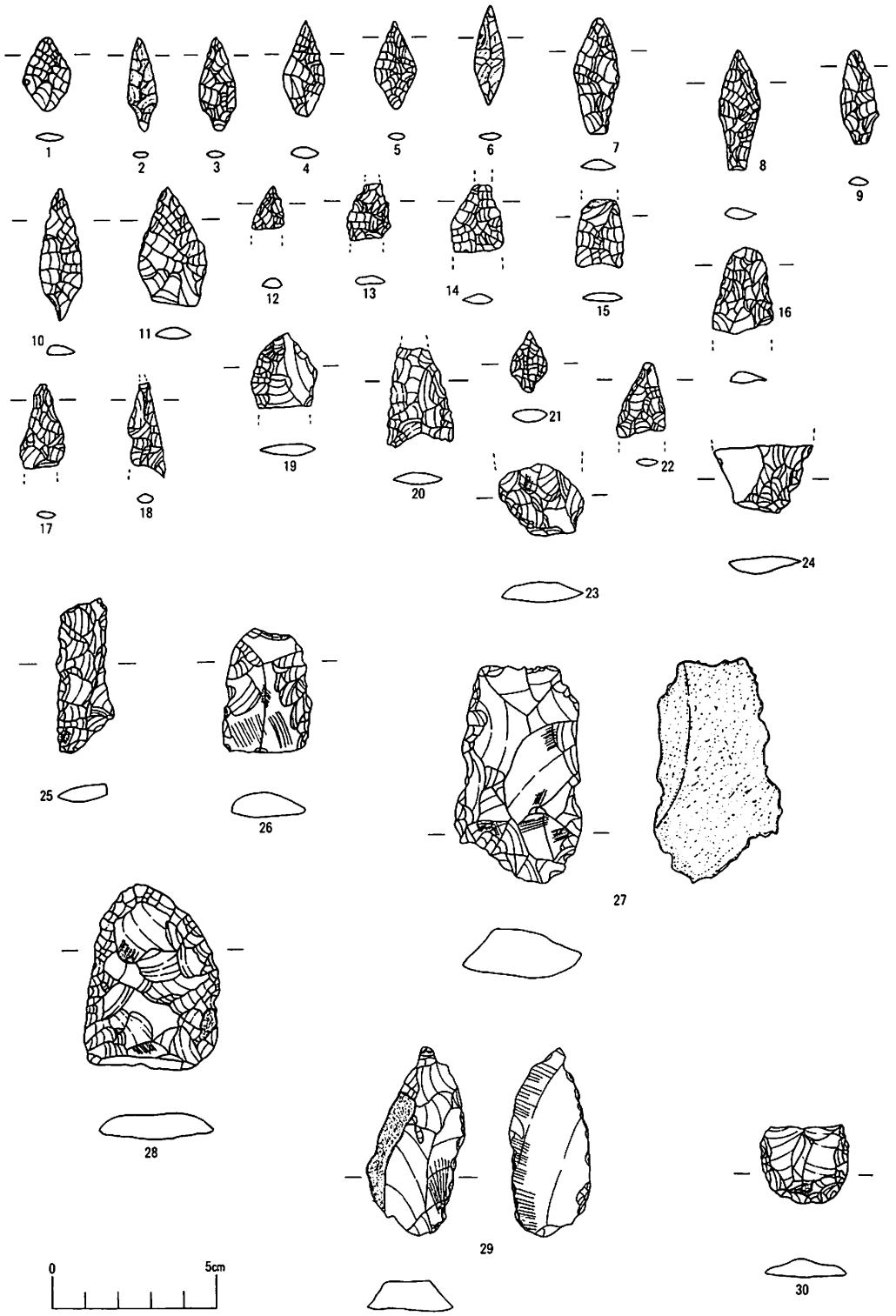

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
5cm

図15　出土石器（1）

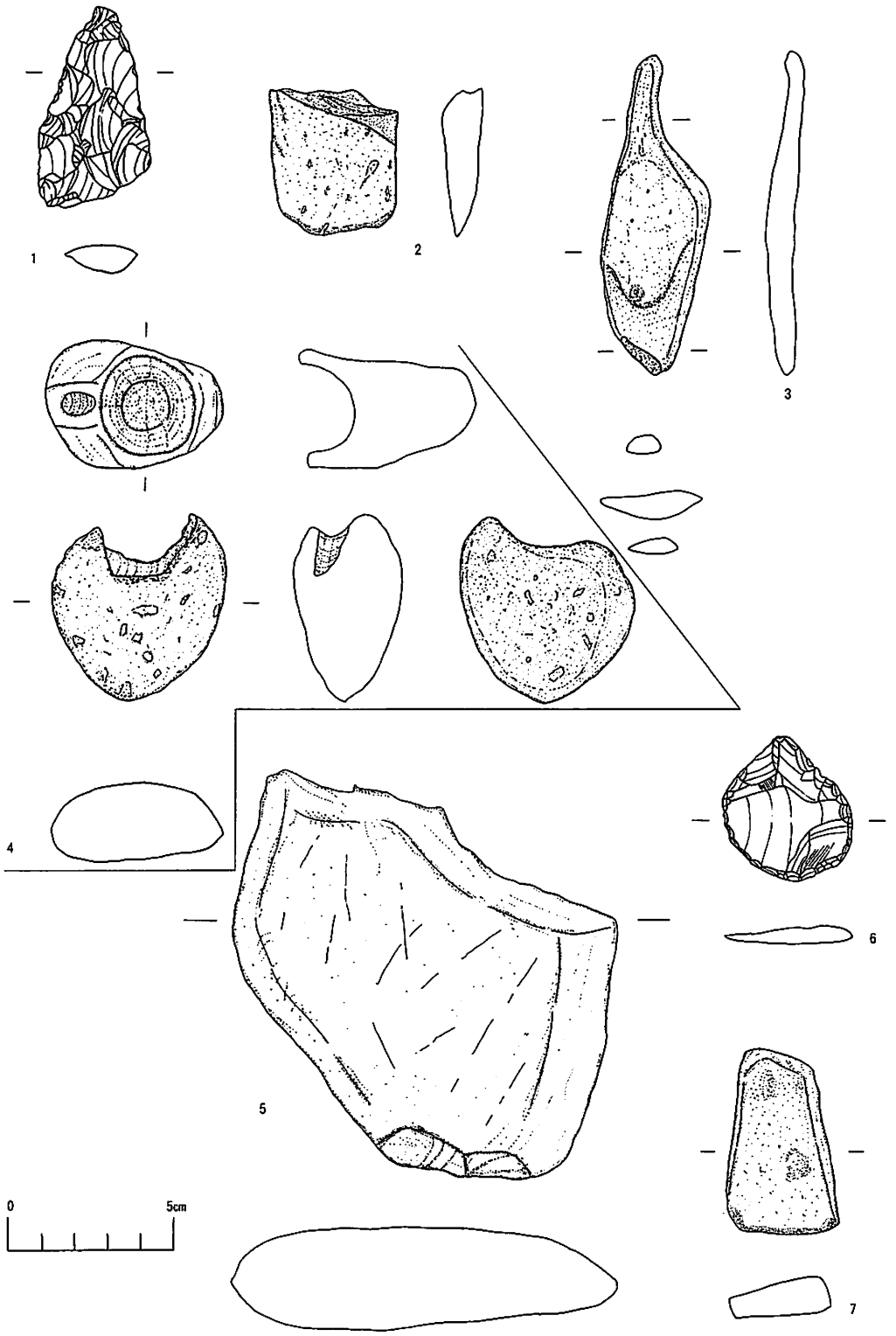


図16　出土石器（2）

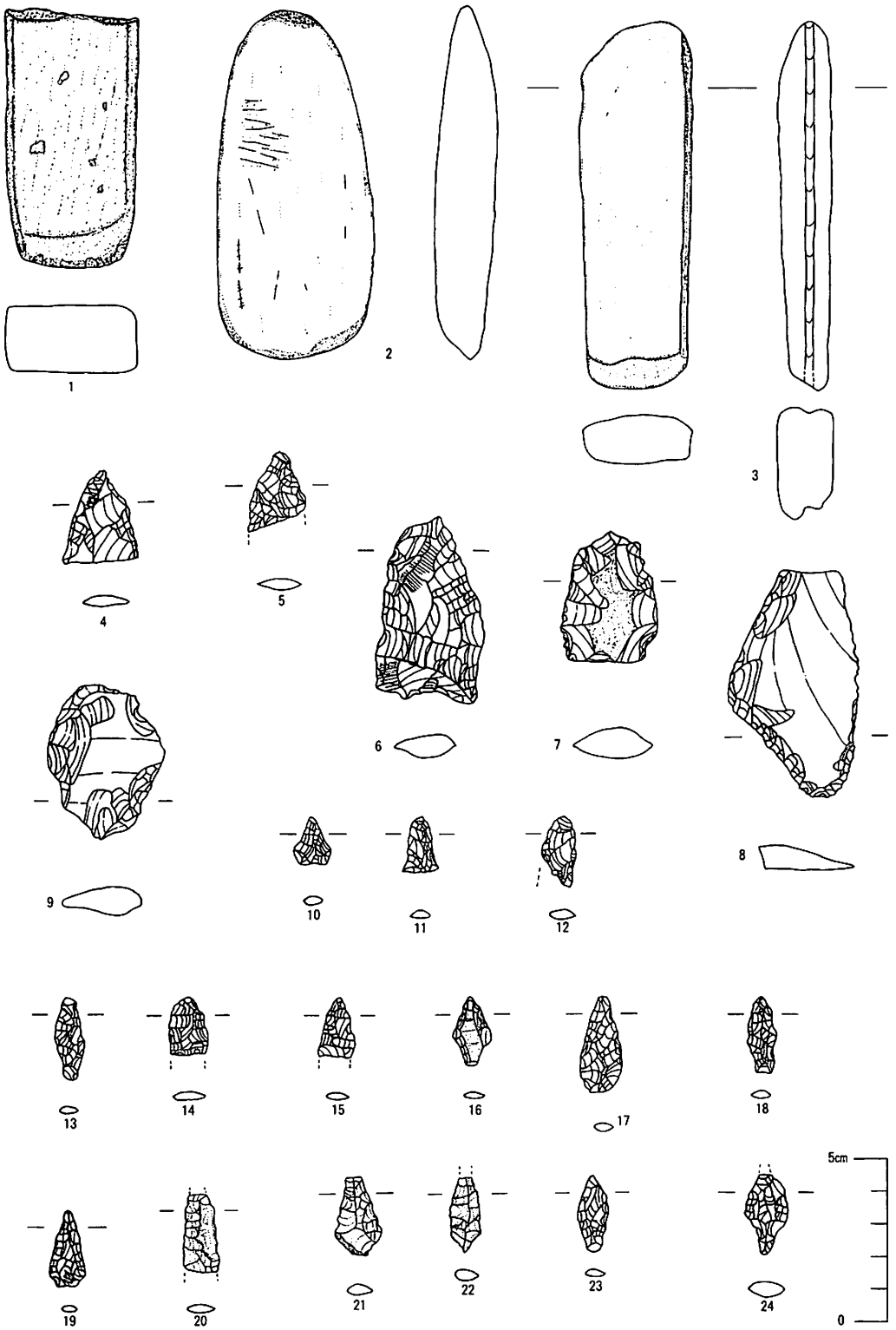


図17　出土石器（3）

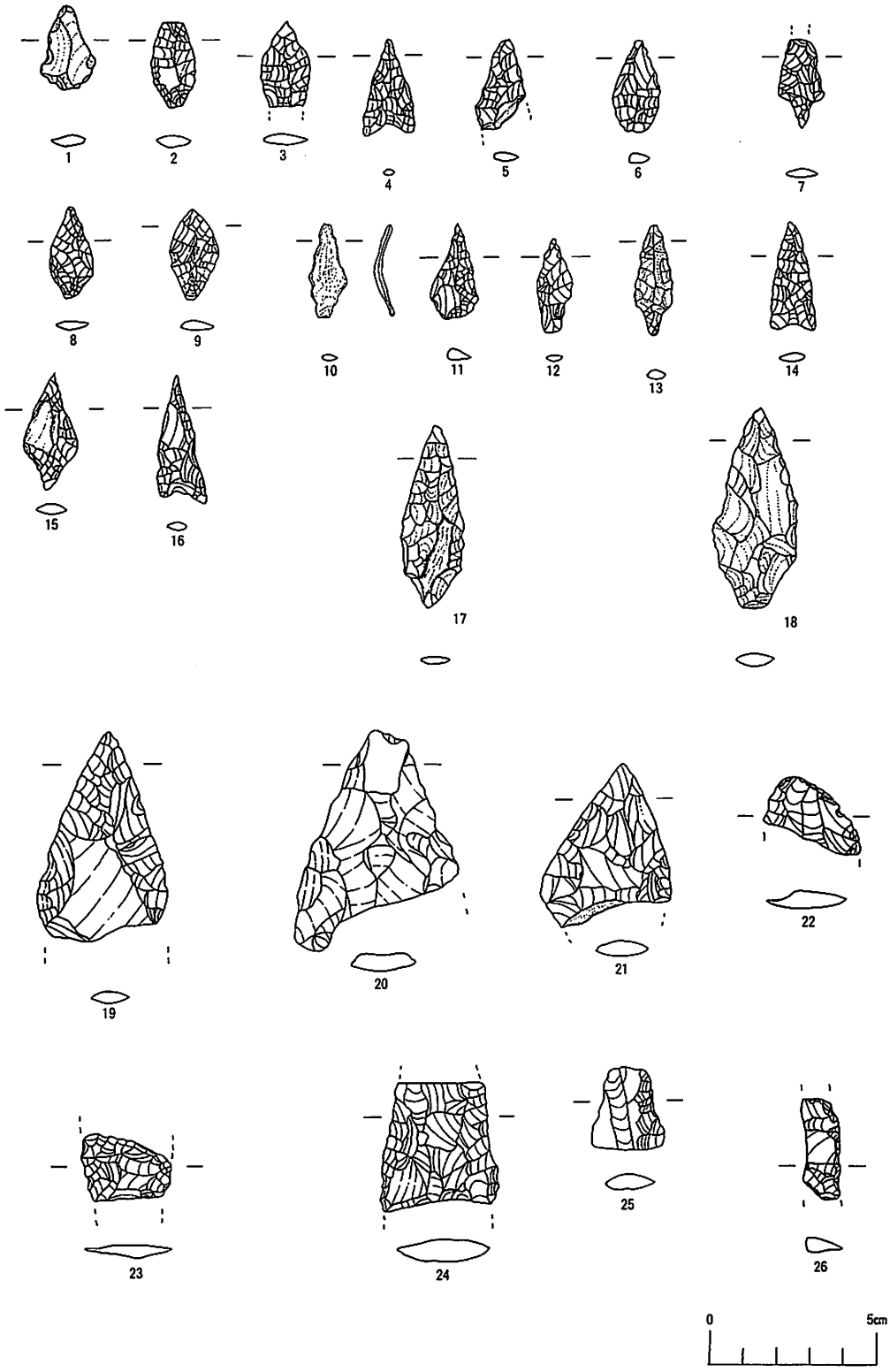


図18　出土石器（4）

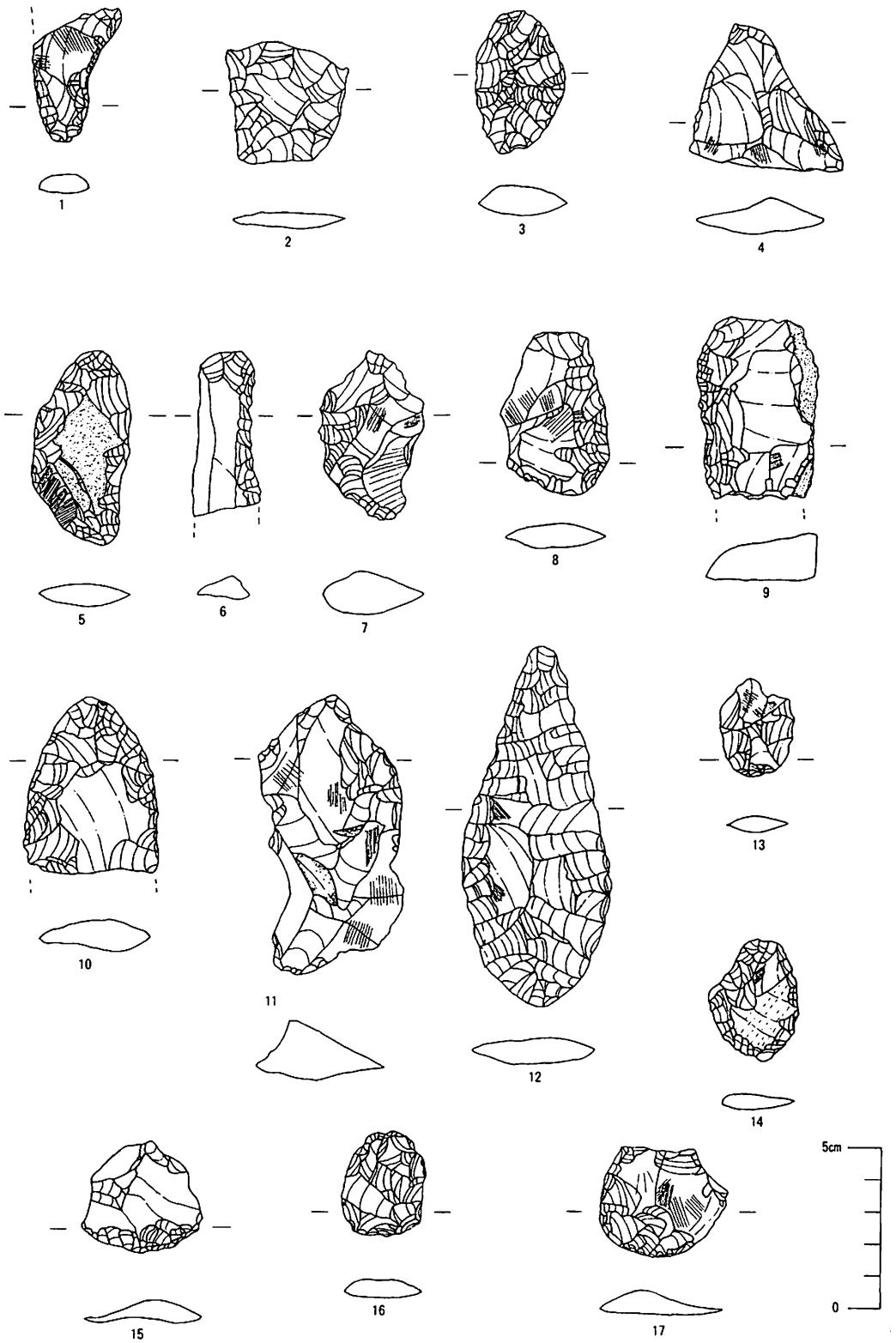


図19　出土石器（5）

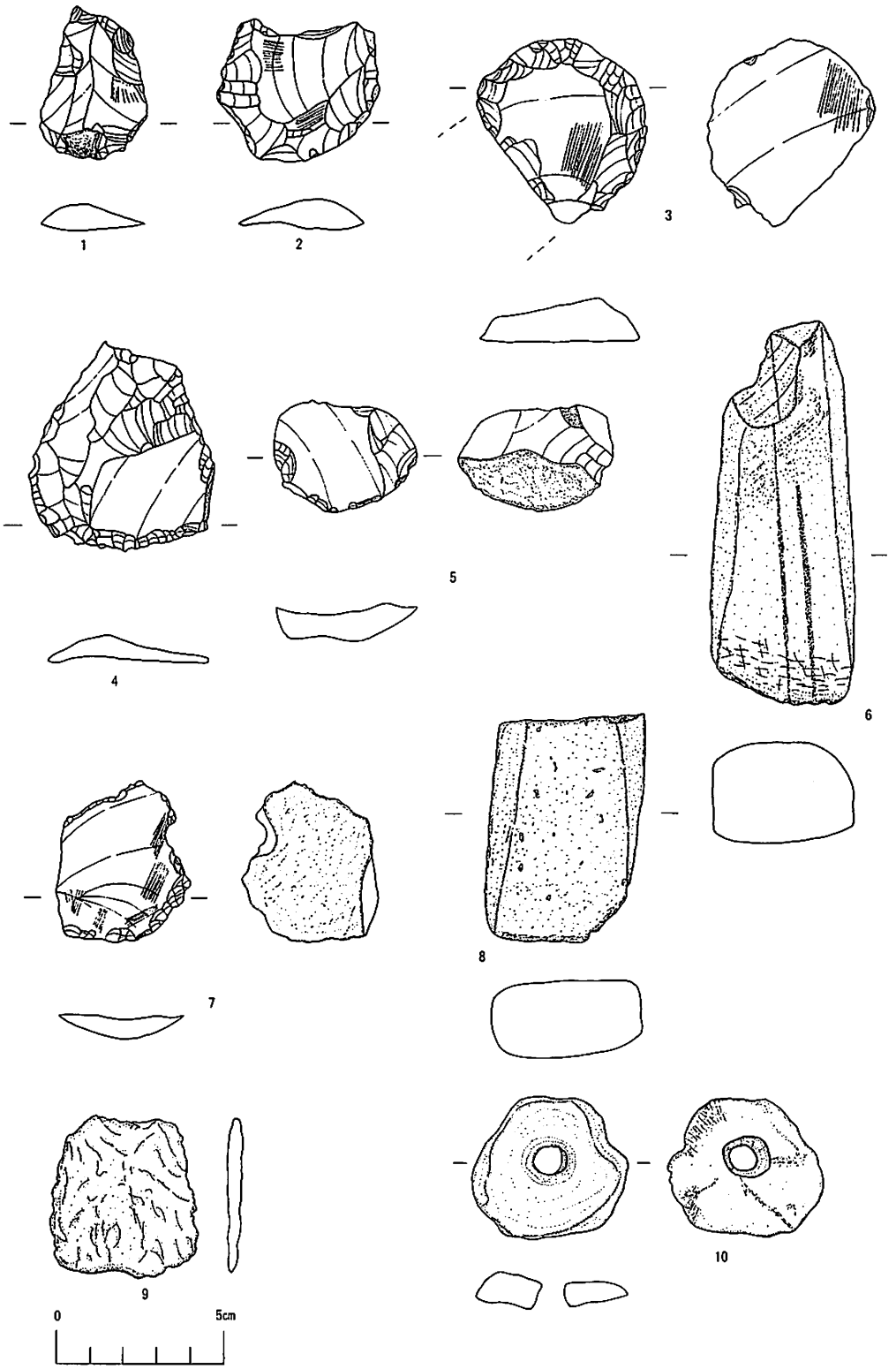


図20　出土石器（6）

表2　出土石器・骨角器一覧　*()は残存部の計測値

No.	挿図no.	遺物	計測値(cm)	グリッド	層位	備考	遺物No.
1	図15-1	石鏃	2.2×1.5×0.2	D1北西隅	床		NS08-1172
2	図15-2	石鏃	2.8×0.8×0.2	D2	床	凝灰岩	NS08-1413
3	図15-3	石鏃	2.8×1.1×0.2	C1南隅	床		NS08-1268
4	図15-4	石鏃	2.9×1.3×0.3	C1南隅	床		NS08-1267
5	図15-5	石鏃	2.7×1.3×0.2	C1南隅	床		NS08-1269
6	図15-6	石鏃	3.1×0.9×0.2	C1南隅	床	頁岩	NS08-1270
7	図15-7	石鏃	3.5×0.9×0.4	C1	床		NS08-1082
8	図15-8	石鏃	3.7×1.2×0.3	D'1	床		NS08-343
9	図15-9	石鏃	2.9×1.1×0.2	C1	床		NS08-1355
10	図15-10	石鏃	4.1×1.3×0.3	C1南隅	床		NS08-1266
11	図15-11	石鏃	3.7×2.0×0.4	D2	床		NS08-193
12	図15-12	石鏃	(1.3)×(1.0)×(0.3)	D2	床		NS08-1412
13	図15-13	石鏃	(1.8)×(1.3)×(0.3)	D2	床		NS08-1411
14	図15-14	石鏃	(2.1)×(1.6)×(0.3)	D2	床	貼り床残骸の下から	NS08-1102
15	図15-15	石鏃	(2.1)×(1.4)×(0.2)	D1北西隅	床		NS08-1188
16	図15-16	石鏃	(2.6)×(1.9)×(0.4)	D1	床		NS08-1249
17	図15-17	石鏃	2.6×1.4×0.3	D1	床		NS08-1256
18	図15-18	石鏃	2.9×1.2×0.3	C1	床		NS08-1080
19	図15-19	石鏃	(2.0)×(3.0)×(0.5)	C1	床		NS08-766
20	図15-20	石鏃	(3.0)×(2.0)×(0.3)	C1	床		NS08-1366
21	図15-21	石鏃	1.8×1.1×0.4	D2	床	柱穴内から	NS06-430
22	図15-22	石鏃	(2.3)×(1.4)×(0.2)	D2	床	貼り床残骸の下から	NS06-529
23	図15-23	石槍	(2.2)×(2.5)×(0.6)	D1	床	基部	NS08-928
24	図15-24	石槍	(2.0)×(3.0)×(0.5)	D1北西隅	床		NS08-1169
25	図15-25	削器	4.7×1.7×0.4	D1	床		NS08-935
26	図15-26	削器	3.8×2.1×0.7	D1	床		NS08-847
27	図15-27	削器	6.6×3.9×2.2	D1	床		NS08-1229
28	図15-28	削器	5.7×3.9×0.8	D1南西隅	床		NS07-1507
29	図15-29	削器	5.8×2.7×0.9	D'1	床		NS08-369
30	図15-30	スクレーパー	(2.4)×(2.3)×(0.6)	D2	床	貼り床残骸の下から	NS06-514
31	図16-1	削器	5.9×3.3×0.8	C1	床		NS08-959
32	図16-2	石斧	(4.4)×(3.7)×(1.2)	C1	床	泥岩	NS08-1365
33	図16-3	異形石器	9.3×3.1×0.8	D1	床	堆積岩	NS05-938
34	図16-4	異形石器	5.7×5.2×3.1	D1	床	安山岩	NS08-846
35	図16-5	叩き石	(13.3)×(11.8)×(3.2)	C1	床	緑泥片岩	NS08-973
36	図16-6	スクレーパー	4.3×3.9×0.5	D'1	床	骨集中域から	NS07-855
37	図16-7	石斧	5.6×3.4×1.1	E1	床	泥岩/骨集中域から	NS07-1034
38	図17-1	砥石	(7.9)×(4.1)×(2.1)	E1	床	砂岩/骨集中域から	NS07-737
39	図17-2	石斧	10.6×4.6×1.3	D'1	床	緑泥片岩/骨集中域から	NS07-912
40	図17-3	異形石器	11.2×3.4×1.6	D2	床	緑泥片岩/貼り床残骸の下から	NS06-545
41	図17-4	石槍	(2.8)×(2.3)×(0.2)	D2	埋土	炭化材の上から	NS06-300
42	図17-5	石鏃	(2.4)×(1.7)×(0.3)	E1	床直	炭化材の下から	NS08-454
43	図17-6	石槍	(5.7)×(3.1)×(0.5)	D2	埋土	炭化材の上から	NS06-307
44	図17-7	削器	4.0×2.9×0.9	E1	床直	炭化材の下から	NS08-428
45	図17-8	削器	6.9×3.9×0.9	D2	埋土	炭化材の上から	NS06-296
46	図17-9	削器	4.7×3.6×1.0	E1	埋土	炭化材の上から	NS08-424
47	図17-10	石鏃	(1.4)×(1.1)×(0.3)	D1	埋土		NS06-688
48	図17-11	石鏃	(1.7)×(1.2)×(0.4)	C1	埋土		NS08-297
49	図17-12	石鏃	(2.2)×(1.0)×(0.3)	D'1	埋土		NS08-1056
50	図17-13	石鏃	2.6×0.9×0.3	D1	埋土		NS08-641
51	図17-14	石鏃	(1.8)×(1.1)×(0.2)	D1南西隅	埋土		NS07-1317
52	図17-15	石鏃	(1.8)×(1.1)×(0.2)	D'1	埋土	炭化材の上から	NS07-1709
53	図17-16	石鏃	2.1×1.2×0.2	D'1	埋土		NS08-1059
54	図17-17	石鏃	2.9×1.3×0.3	D1	埋土		NS08-685
55	図17-18	石鏃	2.3×0.9×0.3	D1	埋土		NS08-576
56	図17-19	石鏃	2.3×1.1×0.2	D1	埋土		NS05-1140
57	図17-20	石鏃	(2.4)×(1.1)×(0.2)	D2	埋土	火を受けている	NS06-67
58	図17-21	石鏃	(2.4)×(1.4)×(0.3)	一括	埋土	頁岩	NS06-346-2
59	図17-22	石鏃	2.3×0.9×0.3	D1	埋土	頁岩	NS05-41
60	図17-23	石鏃	2.4×1.0×0.2	E1	埋土		NS07-655
61	図17-24	石鏃	(2.4)×(1.3)×(0.4)	D1	埋土		NS05-648
62	図18-1	石鏃	2.5×1.5×0.3	C1	埋土	凝灰岩	NS08-336
63	図18-2	石鏃	(2.6)×(1.4)×(0.3)	一括	埋土		NS06-346
64	図18-3	石鏃	(2.5)×(1.5)×(0.3)	C1南隅	床	柱穴内から	NS08-1318
65	図18-4	石鏃	2.9×1.5×0.3	C1	埋土		NS08-296

66	図18-5	石鏃	(2.7)×(1.5)×(0.4)	D'1	埋土		NS07-1143
67	図18-6	石鏃	2.7×1.4×0.2	D1	埋土		NS05-1078
68	図18-7	石鏃	(2.7)×(1.4)×(0.4)	D1	埋土		NS05-539
69	図18-8	石鏃	2.7×1.3×0.2	E1	埋土		NS08-762
70	図18-9	石鏃	2.7×1.5×0.3	D2	埋土		NS06-26
71	図18-10	石鏃	2.8×1.1×0.2	一括	床	発泡している	NS08-1199
72	図18-11	石鏃	2.8×1.4×0.4	D1	埋土		NS08-578
73	図18-12	石鏃	2.8×1.0×0.4	E1	埋土		NS08-83
74	図18-13	石鏃	3.2×1.0×0.3	D1北東隅	埋土	緑泥片岩	NS07-1413
75	図18-14	石鏃	3.2×1.3×0.2	D1	埋土		NS08-577
76	図18-15	石鏃	3.4×1.6×0.2	D2	埋土		NS05-1291
77	図18-16	石鏃	3.9×1.5×0.2	D2	埋土		NS06-226
78	図18-17	石槍	5.5×1.8×0.3	D1	埋土	安山岩	NS05-1223
79	図18-18	石槍	6.0×2.5×0.4	D1	埋土	安山岩	NS05-560
80	図18-19	石槍	6.3×3.9×0.5	D2	埋土		NS06-82
81	図18-20	石槍	(6.6)×(4.9)×(0.8)	D1北東隅	埋土	石銛？	NS07-1341
82	図18-21	石槍	(4.8)×(3.9)×(0.5)	D2北東隅	埋土		NS07-1666
83	図18-22	石槍	(2.2)×(2.9)×(0.5)	D1	埋土		NS08-537
84	図18-23	石槍	(2.1)×(2.6)×(0.4)	D2	埋土		NS06-9
85	図18-24	石槍	(3.9)×(3.6)×(0.4)	壁清掃時	埋土		NS05-882
86	図18-25	削器	2.5×2.2×0.4	D1南西隅	埋土		NS07-1311
87	図18-26	削器	(3.0)×(1.0)×(0.4)	D1	埋土		NS08-611
88	図19-1	削器	(4.1)×(2.2)×(0.6)	D2北東隅	埋土		NS07-1662
89	図19-2	削器	3.8×3.6×0.5	一括	埋土		NS08-1212
90	図19-3	削器	4.3×2.4×0.8	D'1	埋土		NS07-1132
91	図19-4	削器	4.5×4.7×1.1	D2北東隅	埋土		NS07-1673
92	図19-5	削器	5.0×3.0×0.6	D2	埋土		NS05-1284
93	図19-6	削器	(5.1)×(2.0)×(0.7)	D1	埋土		NS08-527
94	図19-7	削器	5.2×3.2×1.3	D1	埋土		NS05-512
95	図19-8	削器	5.0×3.3×0.9	D1北西隅	埋土		NS07-1551
96	図19-9	削器	5.6×3.7×1.3	D2	埋土		NS06-183
97	図19-10	削器	(5.4)×(4.1)×(0.9)	D2北東隅	埋土		NS07-1665
98	図19-11	削器	8.7×4.0×1.7	E1	埋土		NS07-337
99	図19-12	削器	11.1×4.5×0.8	D2北東隅	埋土		NS07-1677
100	図19-13	スクレーパー	3.1×2.3×0.5	D1	埋土		NS05-610
101	図19-14	スクレーパー	3.8×2.7×0.4	C1	埋土		NS08-276
102	図19-15	スクレーパー	3.5×3.7×0.6	一括	埋土		NS06-325
103	図19-16	スクレーパー	3.2×2.5×0.5	E1	埋土		NS08-725
104	図19-17	スクレーパー	3.4×3.4×0.8	E1	埋土		NS08-55
105	図20-1	スクレーパー	4.6×3.2×0.8	D1	埋土		NS05-1136
106	図20-2	スクレーパー	4.2×4.9×0.9	D2	埋土		NS08-800
107	図20-3	スクレーパー	5.6×5.0×1.3	D'1	埋土		NS08-131
108	図20-4	スクレーパー	6.3×5.6×1.4	D2	埋土		NS06-128
109	図20-5	スクレーパー	3.4×4.3×1.0	D1	埋土		NS05-326
110	図20-6	石斧	11.5×4.3×3.0	E1	埋土	緑泥片岩	NS07-230
111	図20-7	スクレーパー	4.8×3.9×0.6	E1	埋土		NS08-718
112	図20-8	石斧	6.9×4.5×2.3	D1	埋土	泥岩	NS05-113
113	図20-9	石斧	4.9×4.4×0.5	E1	埋土	安山岩	NS07-30
114	図20-10	有孔石器	4.3×4.7×1.1	D1	埋土	泥岩	NS05-579
115	図21-1	有孔石器	7.5×7.0×2.2	E1	埋土	泥岩	NS07-320,321
116	図21-2	砥石	11.5×2.4×1.0	D1	埋土	砂岩	NS08-606
117	図21-3	骨斧	19.4×6.1×1.8	D'1	埋土	骨集中域	NS07-989
118	図21-4	銛頭	8.1×1.6×0.6	E1	埋土	骨集中域	NS07-526
119	図21-5	針入れ	10.8×1.1×0.8	E1	埋土	骨集中域	NS07-18

5. 能取岬西岸遺跡出土の動物遺体

梅田　広大（網走市立郷土博物館）

はじめに

能取岬西岸遺跡は網走市美岬、標高約40mの海岸段丘上に位置する。遺跡はこれまでの調査によって、オホーツク文化期の数軒の竪穴が存在する可能性とともに、崖面の自然崩落による遺跡の消失が指摘されてきた。北海道立北方民族博物館では、平成8年の試掘調査によって確認された、やはり将来的に崩落・消失を免れ得ない住居跡1軒について平成17年より5ヵ年にわたり調査を行ってきた。筆者もこの調査に幾度か参加させていただくとともに、出土した動物遺体について分析させていただく機会を得た。本稿では調査時の所見をふまえながら、能取岬西岸遺跡における動物遺体について報告する。

第2号住居跡出土の動物遺体について

能取岬西岸遺跡第2号住居跡から出土した動物遺体は173点にのぼる。これらはほとんどが住居の床面ないし床直上から出土したものであり、各々「骨集中」、「骨集中1」などとして取り上げられた。住居は周溝のあり方から複数回の建て替えが行われたものと考えられる。資料は焼けているもの112点、焼けていないもの61点がある。動物遺体については前者を住居の焼失（焼却）、すなわち廃絶時の住居跡にともなうものとして取り扱う。オホーツク文化期の竪穴住居跡からは通例、動物骨の集積である「骨塚」が設けられることが知られている。当住居跡における動物遺体は多くが原形をとどめない破砕した骨片であったが、同定しえた資料からはオホーツク文化に特有のあり方を推察することができた。本稿では取り上げ時の遺構名である「骨集中」を用いるが、これは各遺構の検出状況および規模から調査担当者が判断したものであり、これに従うものである。

焼けている資料について

C1区骨集中出土資料

住居跡内南側に位置する。なお隣接するD1区出土資料のうちいくつかは当骨集中にともなうものと判断される（表１の「C1区骨集中相当」）。アザラシ、トド、クジラがあり、アザラシではアゴヒゲアザラシとみられる前頭骨1点のほか、上顎骨3点、側頭骨片1点（写真の1～4）、鼓骨片などが、トドでは上顎骨1点（写真の5）のほか、頬骨、側頭骨片があった。鰭脚類では小断片化した頭骨破片も多数出土している。四肢骨はアシカ科腓骨遠位端1点のほか、取り上げられなかったものとして、被熱炭化したアシカ科の中心橈側手根骨1点があったことを付け加えておく。クジラは大型のクジラの肩甲骨（写真の8）で、肩峰と関節上結節は切断されている。なお後述する住居跡内北側に位置するE1区骨集中から出土したクジラ骨片（表１の№583）が接合したが、これについては整理中の混同によるものと判断した。クジラ類では他に種不明のイルカ胸骨1点（写真の7）が出土している。

D0区出土資料

住居跡内西側からの出土資料である。「骨集中」として取り上げられたものではないが、出土地点や、他の「骨集中」と比較しても規模などに相違ないことから、「D0区骨集中」として取り扱う。D1区出土資料のうちいくつかは当骨集中にともなうものと判断される（表１の「D0区骨集中相当」）。アザラシ、トドのほか、キツネ、タヌキ、ヒグマ、イヌとごく少量の鳥類がある。鰭脚類は多くが

破砕骨片であったが、アザラシでは肩甲骨1点が、トドでは前顎骨1点（写真の6）があった。陸獣もあり、キツネでは距骨1点（写真の10）が、ヒグマでは中手骨または中足骨（写真の14）、指骨（写真の13）が各1点ある。イヌは上腕骨遠位部1点があった。タヌキは取り上げられなかったが、下顎骨をともなう頭骨1点を確認している。頭骨への穿孔の有無は確認できなかった。鳥類ではウ類とみられる上腕骨遠位部1点などがあった。

D2区出土資料

住居跡内南東側から出土した資料であるが、点数も5点と少なく、「骨集中」とはとらえていない。ただし出土地点が壁際である点に注意を払っておきたい。鰭脚類の骨片のほか、キツネ上腕骨遠位部1点（写真の11）、種不明の中・小型陸獣腰椎1点（写真の12）がある。またクジラ類の指骨1点があり、C1区骨集中との関連もうかがわれる。

E1区骨集中出土資料

住居跡内北側に位置する。取り上げ時には「骨集中1」、「骨集中3」とされていたが、調査担当者によれば同一のものとしてよいとの見解があり、ここでは一括して報告する。鰭脚類のほか、キツネ、ウサギ、イヌ、鳥類ではワシ類がある。鰭脚類ではアシカ科の坐骨板などが、ウサギは大腿骨近位部が、キツネ、イヌは上腕骨遠位部がみとめられた。

焼けていない資料について

当住居跡からは前述の焼けた資料のほか、焼けていない資料もあることについてはすでに述べた。これについては少なくとも廃絶時の住居跡にはともなわないものとし、出土資料について概説するにとどめておきたい。多くは部位不明の骨片と化していたが、ほぼ鰭脚類とみてよいとみられる。同定しえたものとして、アザラシでは鼓骨、大腿骨、体幹骨が、トドでは側頭骨片があった。イヌでは3カ月齢程度の下顎骨がある。

住居跡内における動物遺体のあり方について

前項では住居跡内における動物遺体の内容について、遺構単位で個別に報告した。同定しえた資料は表１に示すとおりである。決して資料数は多くなく、全容を把握することは難しいが、少なくとも一定の傾向をとらえることはできた。ここでは当住居跡における動物遺体のあり方について考察する。

当住居跡内における骨集中は図1に示されているとおり、住居の南壁際（C1区骨集中）から西壁際（D0区骨集中）、北壁際（E1区骨集中）にかけて位置する。内容については前述したが、大略トド2個体分の頭骨、アザラシ2個体分の頭骨と2点のヒグマ指骨を含む若干の陸獣骨から構成されている。当住居跡には貼床がみとめられていないが、住居のプランおよび炭化材の出土状況から、南西―北東が長軸方向と考えられる。オホーツク文化の竪穴住居跡では奥壁部にヒグマ頭骨を中心とする骨塚、貼床の開口部側および右左壁部には海獣や中・小型陸獣、ヒグマ四肢骨などからなる骨塚が設けられるとされている。近年のモヨロ貝塚における刻文～貼付文前期に属する4軒の竪穴住居跡の調査からも、当該期にすでに多種多様な鳥獣骨から構成される複数の骨塚を設けることが確認されている（佐藤2009）。刻文～沈線文期に相当する当住居跡における骨集中のあり方は、ほぼ同時期に比定されるモヨロ貝塚8c号竪穴住居跡における骨塚のあり方と非常によく似た傾向を示しているといえよう。加えて、奥壁に相当すると考えられる東（北東）壁際において、1点のヒグマ頭骨片―それ以外の動物骨さえも―がみとめられなかったことは注目に値する。

網走市におけるオホーツク文化遺跡について

網走市におけるオホーツク文化遺跡としてはこれまでモヨロ貝塚、二ツ岩遺跡の調査事例があったが、このたびの能取岬西岸遺跡をくわえて3遺跡となった。これらの遺跡相互の関係については稲垣により課題提起されているところであるが（北海道立北方民族博物館編1999）、明らかとなった能取岬西岸遺跡の住居跡の調査、また近年のモヨロ貝塚の調査をふまえ、若干の考察を行ってみたい。

まず遺跡の立地では、モヨロ貝塚は標高5～6mの海岸砂丘上に、二ツ岩遺跡、能取岬西岸遺跡はいずれも標高40mの海岸段丘上にある。遺跡の時期は、モヨロ貝塚は刻文～貼付文、二ツ岩遺跡は貼付文（未調査の竪穴住居跡3軒あり）、能取岬西岸遺跡は刻文（貼付文期の遺構が存在する可能性も指摘されている）に帰属する。稲垣は二ツ岩遺跡との差異を時期に、モヨロ貝塚との差異を「海獣狩猟に適した場所」として立地に求めている。筆者はこれにモヨロ貝塚における近年の調査事例をふまえ、検討を試みてみたい。

稲垣の「海獣狩猟に適した場所」とする見解には異論ない。ではこの対象となる海獣は何であろうか。筆者はそれは「トド」ではなかったかと推察する。近年のモヨロ貝塚調査において行った多量に出土した動物遺体の同定の結果、調査の行われた2軒の竪穴住居跡内に残された骨塚、および刻文期の貝塚、貼付文期の魚骨層からは、オットセイと好氷性のアザラシ類が多量に出土している。一方トドについては、9号竪穴住居跡の骨塚から頭骨1、大腿骨1、8号竪穴住居跡から幼獣頭骨1があるほかは、概して出土量は多くない。

これに対して、能取岬西岸遺跡では骨集中中から2個体分を、また覆土中にも、脆弱で取り上げられなかったが、巨大な橈骨を確認している。また、断片資料ではあるにせよ、二ツ岩遺跡3号住居址からはトドの骨塚（南骨塚）が報告されている。トドの生態についていえば、繁殖場所は「大陸や大きな島の断崖の下」、繁殖時期は「春から夏にかけてのころ」とされている（和田・伊藤1999）。能取岬および二ツ岩のあたりは過去にトドの繁殖場であったという記録はないが、立地の上では十分に条件を満たしていたものと考えられる。また、現在でも春から初夏にかけて、能取岬下の岩礁上にはたむろするゴマフアザラシの姿を見ることもできる。海獣類にとって恵まれた生息環境を備えていたことがうかがわれよう。

無論1軒の、ましてや一時期の住居跡の調査事例から遺跡全体の性格について論じるのは早計ではあるが、現時点での可能性のひとつとして提起しておきたい。

引用文献

佐藤孝雄 2009
「骨塚から検出された鳥獣遺体」『史跡最寄貝塚―平成15～20年度史跡最寄貝塚史跡等・登録記念物保存修理事業発掘調査報告書』網走市教育委員会

北海道開拓記念館 1982
『二ツ岩』北海道開拓記念館研究報告第7号

北海道立北方民族博物館編 1999
「第3章　能取岬西岸遺跡」『能取岬周辺の遺跡　美岬4遺跡・能取岬西岸遺跡・美岬5遺跡』北方民族博物館調査報告2

和田一雄・伊藤徹魯 1999
『鰭脚類―アシカ・アザラシの自然史―』東京大学出版会

表1 第2号住居跡出土動物遺体一覧（被熱資料・同定資料）

調査区	遺物番号		遺構名1	遺構名2	種名	出土部位1	出土部位2	数量	備考
C1	307		骨集中		アゴヒゲアザラシ	前頭骨		1	309と接合
C1	309		骨集中		アゴヒゲアザラシ	前頭骨			307と接合
C1	299		骨集中		アザラシ科	上顎骨L	C-P3部 歯牙全脱	1	
C1	304		骨集中		アザラシ科	上顎骨L	C-P3部 歯牙全脱	1	
C1	311		骨集中		アザラシ科	上顎骨R	M1歯槽部残存	1	
C1	314		骨集中		アザラシ科	鱗状骨R		1	322と接合
C1	322		骨集中		アザラシ科	鱗状骨R			314と接合
C1	226		骨集中		アザラシ科	耳周骨R		1	302・333と接合
C1	302		骨集中		アザラシ科	耳周骨R			226・333と接合
C1	333		骨集中		アザラシ科	耳周骨R			226・302と接合
C1	323		骨集中		アザラシ科	耳骨L.	fr.	1	330・332と接合
C1	330		骨集中		アザラシ科	耳骨L.	fr.		323・332と接合
C1	332		骨集中		アザラシ科	耳骨L.	fr.		323・330と接合
C1	313		骨集中		トド	前・上顎骨L	13-P2部 歯牙全脱	1	325と接合
C1	325		骨集中		トド	前・上顎骨L	13-P2部 歯牙全脱		313と接合
C1	310		骨集中		トド	頬骨L		1	318と接合
C1	318		骨集中		トド	頬骨L			310と接合
C1	298		骨集中		トド	鱗状骨R		1	
C1	321		骨集中		トド?	鱗状骨L	fr.	1	
C1	303		骨集中		トド	鱗状骨L	fr.	1	
C1	204	他一括取り上げ	骨集中	材層*ほとんどが溝から	クジラ	肩甲骨L		1	肩峰・関節上結節を切断 207他・326他・592他・1344他は同一片
C1	207	他一括取り上げ	骨集中	材層*ほとんどが溝から	クジラ	肩甲骨L			204他・326他・592他・1344他は同一片
C1	326	他一括取り上げ	骨集中	材層*ほとんどが溝から	クジラ		fr.		204他・207他・592他・1344他は同一片
C1	592	他一括取り上げ	骨集中	材層*ほとんどが溝から	クジラ	肩甲骨L.	fr.		204他・207他・326他・1344他は同一片
C1	1344	他一括取り上げ	骨集中	材層*ほとんどが溝から	クジラ		fr.		204他・207他・326他・592他は同一片
D0	966・967		—	材層	不明鳥類	椎骨		1	
					ウ類	上腕骨R	中～遠位部	1	
D0	139		—	西壁	鰭脚類	肋骨	中間部	1	
D0	356		—	焼土上から	イヌ	上腕骨R	遠位部	1	
D0	357		—	焼土上から	ヒグマ	基節骨	中～遠位部	1	
D0	1061		—		アザラシ科	肩甲骨R		1	1063・1068と接合
D0	1063		—		アザラシ科	肩甲骨R			1061・1068と接合
D0	1068		—		アザラシ科	肩甲骨R			1061・1063と接合
D0	1068		—		鰭脚類	椎骨	fr.	1	
D1	92		—	南壁際	アザラシ?	前頭骨?	fr.	1	
D1	135		—		不明鳥類	部位不明	管骨fr.	1	
D1	389		—		鰭脚類	肋骨	近～中間部	1	
D1	580		—		鰭脚類	膝蓋骨		1	
D1	581		—		鰭脚類	指骨		1	
D1	584		—		鰭脚類	基節骨	脱落近位端	1	
D1	671		—		鰭脚類	椎骨	fr.	1	
D1	673		—		キツネ	距骨		1	D0区骨集中相当
D1	705		—	北壁際	ヒグマ	中手/足骨		1	D0区骨集中相当
D1	706		—	北壁際	トド	前頭骨L	歯牙全脱	1	D0区骨集中相当
D1	737		—	南壁際	不明鳥類	尺骨R L不明	中間部	1	
D1	948		—		鰭脚類	指骨	中～遠位部	1	
D1	1025		—	南西壁際	イルカ	胸骨		1	C1区骨集中相当 1026・1027・1030・1031と接合
D1	1026		—	南西壁際	イルカ	胸骨			C1区骨集中相当 1025・1027・1030・1031と接合
D1	1027		—	南西壁際	イルカ	胸骨			C1区骨集中相当 1025・1026・1030・1031と接合
D1	1028		—	南西壁際	鰭脚類	肋骨	中間部	1	C1区骨集中相当
D1	1257		—		鰭脚類	手or足根骨		1	
D1	1031		—	南西壁際	イルカ	胸骨			C1区骨集中相当 1025・1026・1027・1030と接合
D1	1032		—	南西壁際	アシカ科（トド?）	腓骨R	遠位部	1	C1区骨集中相当
D1	1418		—	北東壁際	鰭脚類	肋骨	中間部	1	
D2	281		—	西壁際	中型陸獣	椎骨	腰椎	1	
D2	282		—	西壁際	クジラ	指骨		1	283と接合
D2	283		—	西壁際	クジラ	指骨			282と接合
D2	455		—	西壁際	キツネ	上腕骨R	遠位部	1	
E1	1266		骨集中1		イヌ?	上腕骨L	中～遠位部 周辺の一部	1	骨幹に水平方向の刻線あり 1267と接合
E1	1267		骨集中1		イヌ?	上腕骨L	中～遠位部 周辺の一部		骨幹に水平方向の刻線あり 1266と接合
E1	104		—		ウサギ	大腿骨L	近位部	1	105と接合
E1	105		—		ウサギ	大腿骨L	近位部	1	104と接合
E1	469		—	材層上から	ワシ類	手根中手骨R	近～中間部	1	
E1	471		—	材層上から	イヌ?	上腕骨L	遠位部fr.	1	
E1	473		—	材層上から	キツネ	上腕骨R	遠位部	1	
E1	582		—	材層上から	鰭脚類	指骨	遠位部	1	
E1	583		—	材層上から	クジラ	肩甲骨L	fr.		C1骨集中出土クジラと接合 後日混入の疑いあり
E1	1635		骨集中3	周溝直上から	アシカ科?	坐骨板R		1	1637・1638と接合
E1	1637		骨集中3	周溝直上から	アシカ科?	坐骨板R			1635・1638と接合
E1	1638		骨集中3	周溝直上から	アシカ科?	坐骨板R			1635・1637と接合

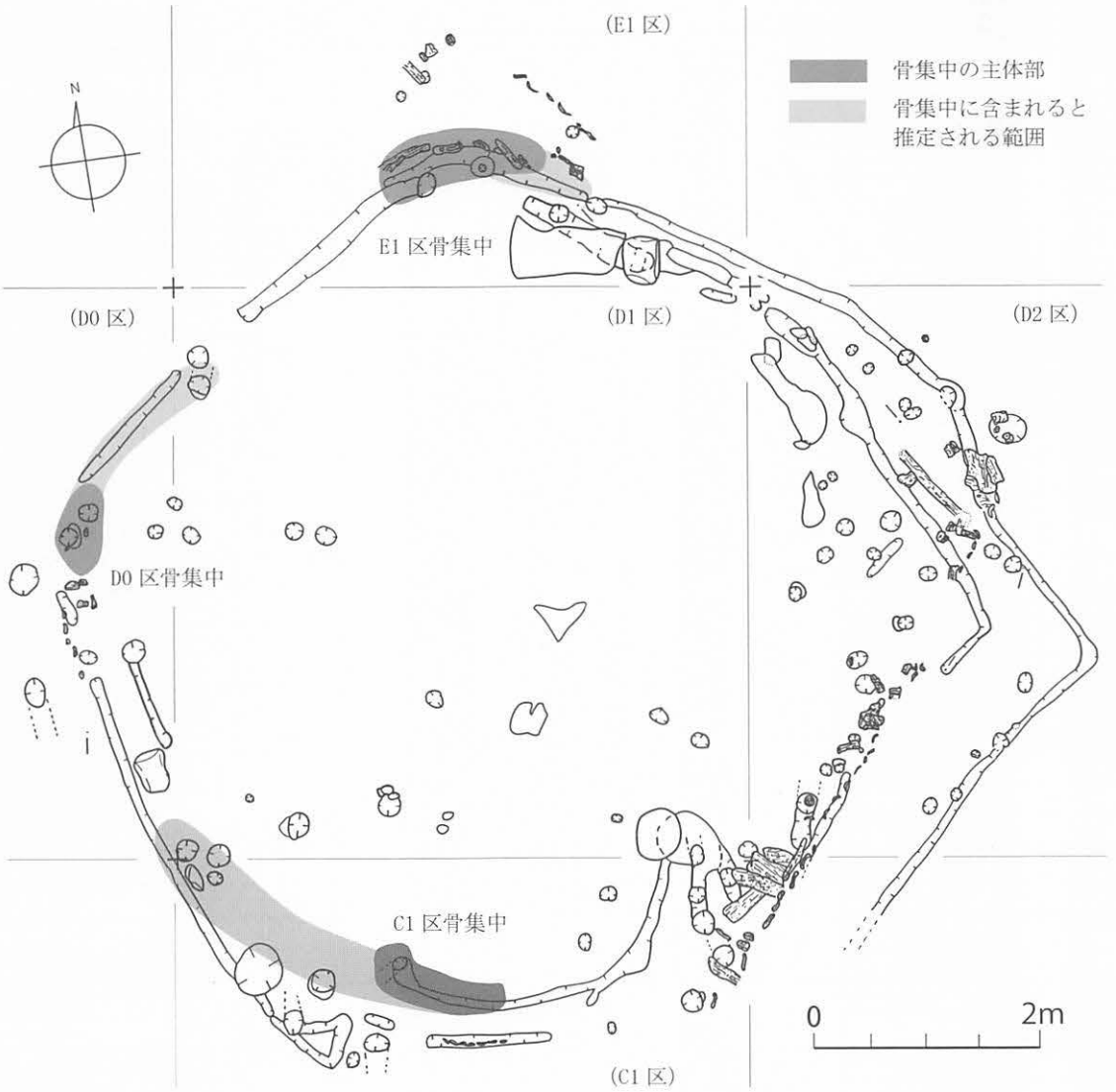


図1　骨集中分布図

表2　上顎骨および同歯牙一覧

調査区	種名	R M1 P4 P3 P2 P1 C I3 I2 I1	L I1 I2 I3 C P1 P2 P3 P4 M1	遺物番号
C1	アザラシ科 (アゴヒゲ?)		(× × × ×)	299
	アザラシ科		(× × × ×)	304
	アザラシ科	(×)		311
	トド		(× × × ×)	313・325
D1	トド		(×)	706

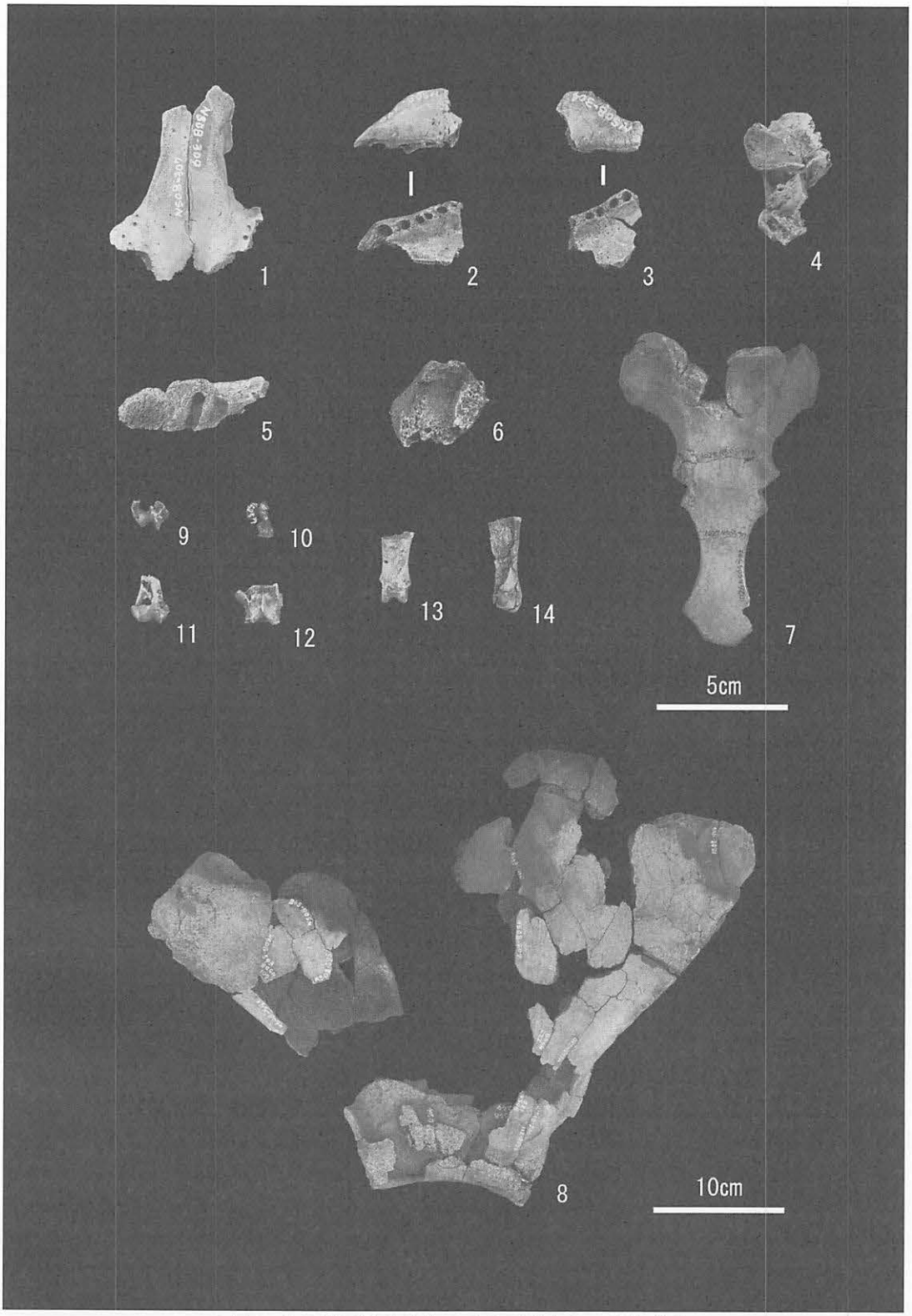


写真　能取岬西岸遺跡第２号住居跡出土の動物遺体

6. 能取岬西岸遺跡2号住居址において出土した炭化材の樹種

佐 野 雄 三[1]、渡 邊 陽 子[2]、守 屋 豊 人[3]

[1] 北海道大学大学院農学研究院、[2] 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター、
[3] 北海道大学埋蔵文化財調査室

a. はじめに

能取岬西岸遺跡2号住居址より出土した計26点の炭化材について、走査電子顕微鏡（SEM）により解剖学的特徴を調べ、樹種同定をおこなった結果について報告する。

b. 研究方法

各資料を小片に割断し、木口面、柾目面、または板目面がうまく露出した破片を選び、SEM用試料台に導電性接着剤で固定した。イオンスパッターにより金をコーティングし、SEMにより検鏡および写真撮影をおこなった。既往の文献（伊東1995～1999; Ohtani 1983, 2000; 石田・大谷1989）やウェブサイト上の識別データベース（森林総合研究所日本産木材識別データベース）を参照し、同定した。

c. 結果と考察

(1) 同定された植物群と同定の根拠

以下に、同定された植物種（群）およびそれぞれの同定の根拠となった解剖学的特徴を検出点数の多かった順に記す。植物名（和名と学名）や分類学的内容は、佐竹ら（1999）によった。

1) トドマツ｛*Abies sachalinensis* (F. Schmidt.) Mast.｝；計16点；写真1～3

早晩材の移行は緩やか。垂直樹脂道、水平樹脂道はない。一部試料に傷害樹脂道あり。放射仮道管は見られない。分野壁孔はスギ型。仮道管にイボ状層が存在。以上の特徴と現植生からトドマツと判断した。

2) イヌエンジュ（*Maackia amurensis* Rupr. et Maxim.）；計3点；写真4～6

環孔材。孔圏外道管の配列は接線状。道管せん孔はすべて単せん孔。道管側壁にベスチャード壁孔が存在。小道管にらせん肥厚が存在。道管相互壁孔は交互状。多列放射組織をもち、大きなものはふつう4～10列。放射組織の構成細胞はすべて平伏細胞。小道管と軸方向柔組織が層階状に配列。以上の特徴と現植生からイヌエンジュと判断した。

3) シナノキ属（*Tilia*）；計2点；写真7～9

年輪界は明瞭。散孔材。道管せん孔はすべて単せん孔。道管相互壁孔は、交互状で個々の輪郭が多角形、大きさが小型。道管要素の全域にらせん肥厚が存在。多列放射組織をもち、大きなものはふつう4～10列。放射組織の構成細胞はすべて平伏細胞。道管要素が層階状配列を示す。以上の特徴から、シナノキ属と同定された。現在の天然分布からシナノキ｛*Tilia japonica* (Miq.) Simonk.｝とオオバボダイジュ（*Tilia maximowicziana* Shiras.）が考えられるが、本結果から種レベルで同定するのは無理である。

4) ハンノキ属（*Alnus*）；計1点；写真10～12

年輪界は明瞭。散孔材。階段せん孔板をもち、バーの数が多い。道管壁にらせん肥厚は存在しな

い。放射組織は単列で、その構成細胞はすべて平伏細胞。道管側壁の壁孔は対列状ないし交互状。集合放射組織は見られず。以上の特徴から、ハンノキ属の中でもヤシャブシ亜属(Subgen. Alnaster)の可能性が高いが、本SEM試料の観察面は解剖学的特徴の確認に適した領域が狭く、集合放射組織の存否の確認には不十分の恐れがあったため、ハンノキ属までの同定とした。

5) ニレ属（*Ulmus*）；計1点；写真13～15

環孔材。孔圏道管は随所で複列。孔圏外道管の配列は接線状。道管せん孔はすべて単せん孔。道管相互壁孔は交互状で大径。らせん肥厚が小径の道管要素にのみ存在する。道管にチロースが頻出。木部繊維に隔壁はない。多列放射組織をもち、大きなものはふつう4～10列。放射組織の構成細胞はすべて平伏細胞。放射組織密度（個数 / mm）は4～12個。以上の特徴から、ニレ属と同定された。現在の北海道における天然分布からハルニレ｛*Ulmus davidiana* Planch. var. *japonica* (Rehder) Nakai｝とオヒョウ｛*U. laciniata* (Trautv.) Mayr｝の2種が考えられるが、本結果から種レベルで同定するのは無理である。

6) ハリギリ｛*Kalopanax septemlobus* (Thunb.) Koidz.｝；計1点；写真16～18

環孔材。孔圏道管は単列。孔圏外道管の配列は接線状。道管せん孔はすべて単せん孔。道管相互壁孔は交互状。らせん肥厚は存在せず。多列放射組織をもち、大きなものはふつう4～10列。放射組織の多列部は平伏細胞で構成され、縁辺部に一列の直立・方形細胞。以上の特徴からハリギリ属と同定され、北日本に自生するハリギリ属の樹種はハリギリのみであることから、ハリギリと同定した。

7) 裸子植物亜門 Gimnospermae（針葉樹）；計2点；写真19～21

軸方向要素はほぼ仮道管で、軸方向柔組織は確認できず、放射組織は単列。仮道管の輪郭は丸く、細胞間隙が頻出。仮道管壁にらせん溝が存在。典型的な圧縮あて材の特徴を示しており、科～種レベルの同定は無理であった。

（2）出土した炭化材の内訳

結果は表1の通りである。26点中、24点で属～種レベルの同定が可能であった。これら24点は6種に分けられ、トドマツが16点で最も多かった。属～種レベルの同定が無理であった2点を含めると、針葉樹が3分の2以上を占めた。

（3）各樹種の出土位置の検討

発掘調査では、外側（旧住居）から内側（新住居）に床面積が縮小されたとして、竪穴住居の建て替え状態が想定されている。炭化材樹種同定によって判別された各樹種の出土位置を竪穴住居址の平面図に示す（図2、5、6）と、柱材にイヌエンジュが利用された外側の住居址（旧住居）と、トドマツといった針葉樹が多用された内側の住居址（新住居）とが存在するようにもとらえられる。今回の樹種同定によって、オホーツク文化の刻文期に針葉樹が住居の構築材に利用される傾向がとらえられるとともに、住居の構築材にみられる針葉樹の利用度合いが時期の違いによって異なる可能性も推測された。

引用文献

石田茂雄・大谷諄 1989

「おもな道産材の構造（最終回）12．形態・構造の整理」『北方林業』41

伊東隆夫 1995～1999

「日本産広葉樹材の解剖学的記載(I～V)」木材研究・資料［31号：81～181 (1995)，32号：66～176 (1996)，33号：83～201 (1997)，34号：30～166 (1998)，35号：47～216 (1999)］.

Ohtani, J. 1983
SEM investigation on the micromorphology of vessel wall sculptures. *Research Bulletin of College Experimental Forest of Hokkaido University* 40
Ohtani, J. 2000
Wood micromorphlogy. Hokkaido University Press.
佐竹義輔ら編著 1999
日本の野生植物（木本編）. 平凡社.
森林総合研究所日本産木材識別データベース[http://f030091.ffpri.affrc.go.jp/index3.html]
(2010年1月16日)

表1．同定結果一覧表

資料番号	出土地点	同定結果
1	東壁際（柱材）	トドマツ *Abies sachalinensis*
2	西壁際	トドマツ *Abies sachalinensis*
3	西壁際	トドマツ *Abies sachalinensis*
4	西壁際	トドマツ *Abies sachalinensis*
5	南壁際（柱材・斜立）	トドマツ *Abies sachalinensis*
6	北壁際	イヌエンジュ *Maackia amurensis*
7	北壁際	トドマツ *Abies sachalinensis*
8	北壁際　（柱材）	イヌエンジュ *Maackia amurensis*
9	北東壁際	トドマツ *Abies sachalinensis*
10	北東壁際	トドマツ *Abies sachalinensis*
11	南西壁際　（柱材）	トドマツ *Abies sachalinensis*
12	南東壁際	ハリギリ *Kalopanax septemlobus*
13	南東壁際	トドマツ*Abies sachalinensis*
14	南東壁際	シナノキ属 *Tilia*
15	南東壁際	トドマツ *Abies sachalinensis*
16	南東壁際	トドマツ *Abies sachalinensis*
17	南東壁際	トドマツ *Abies sachalinensis*
18	南東壁際	トドマツ *Abies sachalinensis*
19	南東壁際	トドマツ *Abies sachalinensis*
20	南東壁際　（柱材）	トドマツ *Abies sachalinensis*
21	覆土　黒色土	ハンノキ属 *Alnus*
22	床面	イヌエンジュ *Maackia amurensis*
23	覆土　黒色土	裸子植物亜門 Gimnospermae（針葉樹 ）
24	床面	シナノキ属 *Tilia*
25	覆土　黒色土	ニレ属 *Ulmus*
26	南壁際（柱材）	裸子植物亜門 Gimnospermae（針葉樹 ）

写真説明
写真1～3．資料11（トドマツ）の木口面（1）、柾目面（2）、板目面（3）.
写真4～6．資料22（イヌエンジュ）の木口面（4）、柾目面（5）、板目面（6）.
写真7～9．資料24（シナノキ属）の木口面（7）、柾目面（8）、板目面（9）.
写真10～12．資料21（ハンノキ属）の木口面（10）、柾目面（11）、板目面（12）.
写真13～15．資料25（ニレ属）の木口面（13）、柾目面（14）、板目面（15）.
写真16～18．資料12（ハリギリ）の木口面（16）、柾目面（17）、板目面（18）.
写真19～21．資料26（針葉樹圧縮あて材）の木口面（19）、柾目面（20）、板目面（21）.

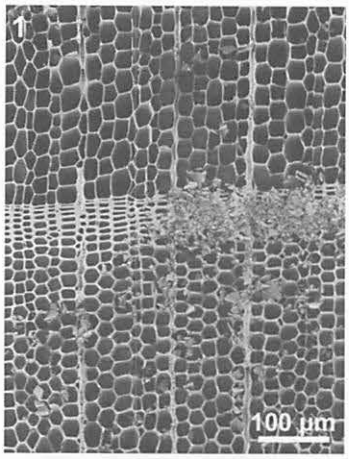


写真１　トドマツ

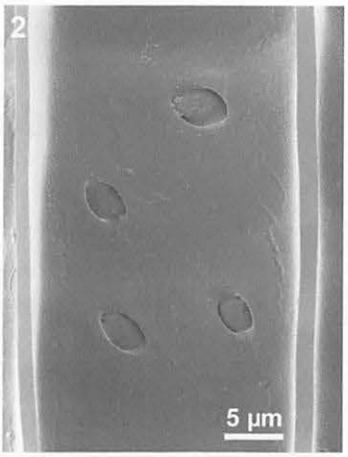


写真２　トドマツ

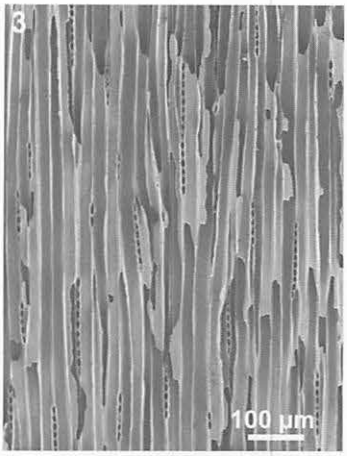


写真３　トドマツ

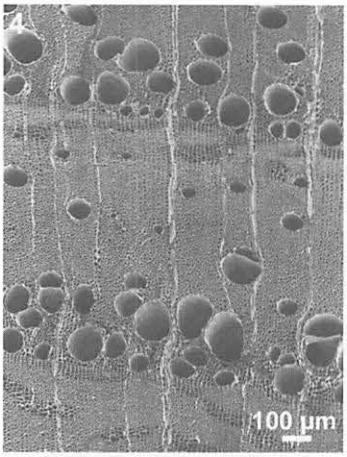


写真４　イヌエンジュ

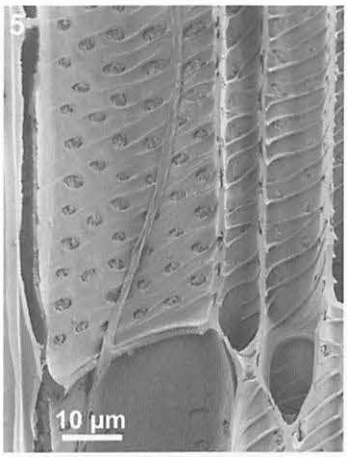


写真５　イヌエンジュ

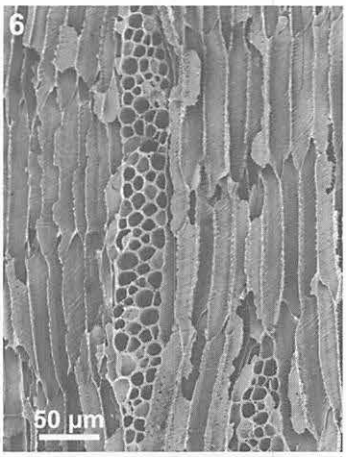


写真６　イヌエンジュ

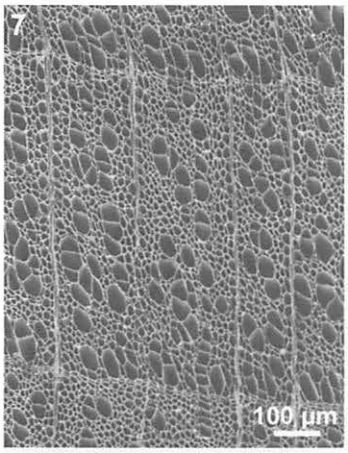


写真７　シナノキ属

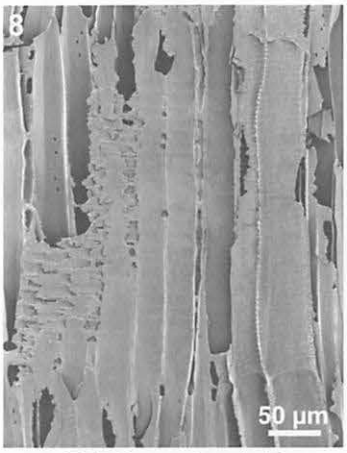


写真８　シナノキ属

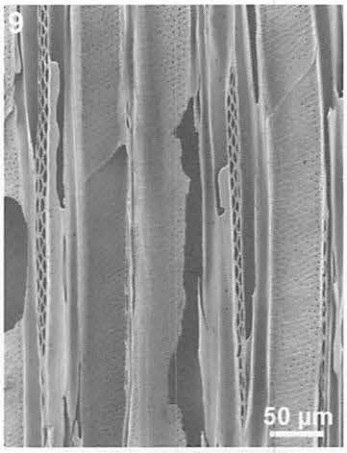


写真９　シナノキ属

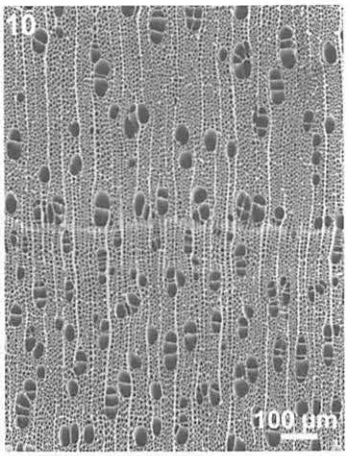


写真10　ハンノキ属

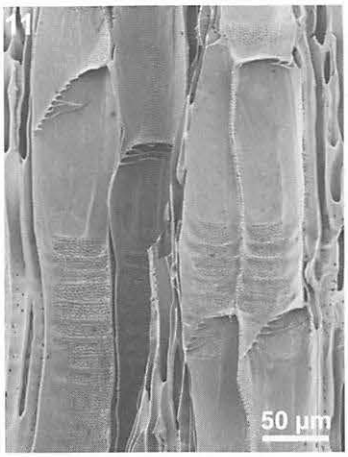


写真11　ハンノキ属

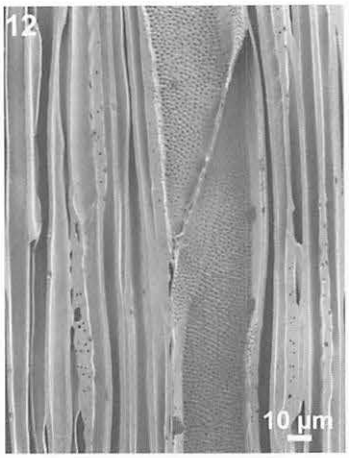


写真12　ハンノキ属

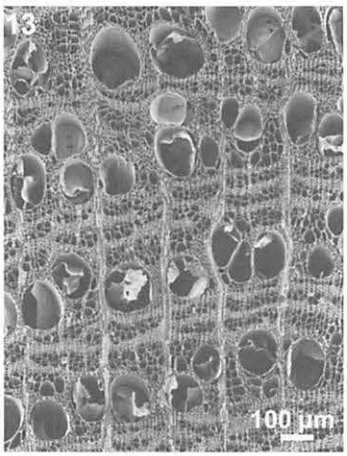


写真13　ニレ属

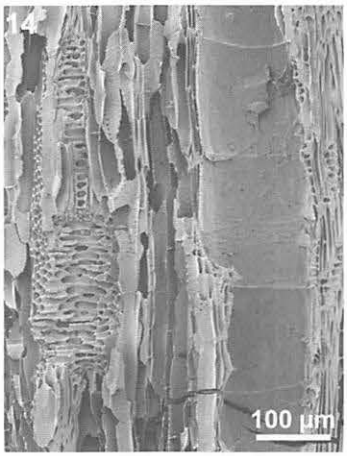


写真14　ニレ属

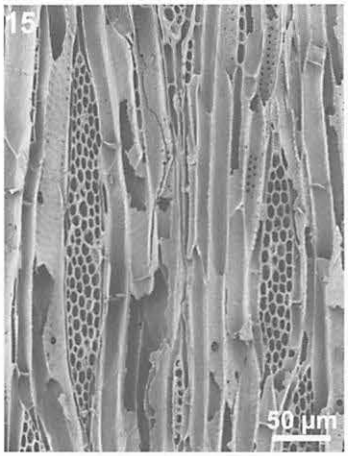


写真15　ニレ属

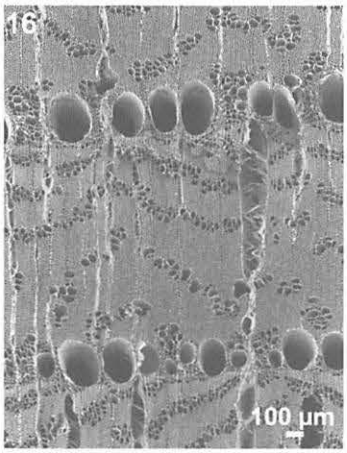


写真16　ハリギリ

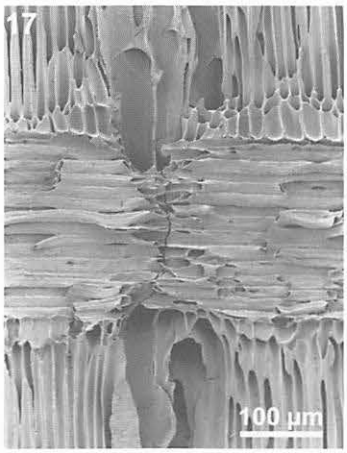


写真17　ハリギリ

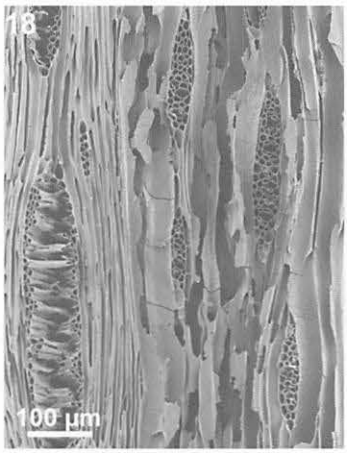


写真18　ハリギリ

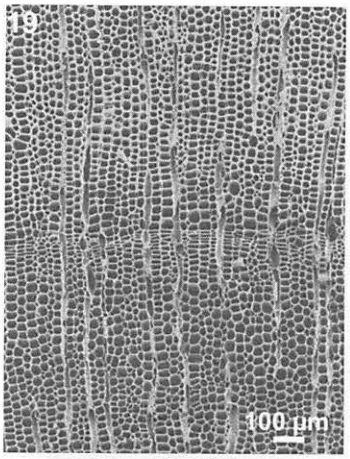


写真19　裸子植物亜門

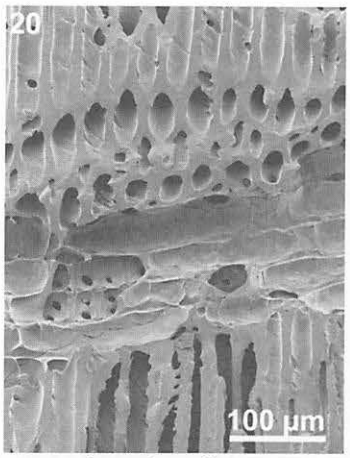


写真20　裸子植物亜門

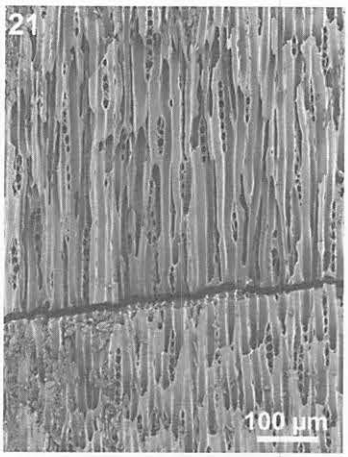


写真21　裸子植物亜門

7.まとめ

能取岬西岸遺跡第2号住居址の発掘調査は、4年間にわたり実質59日間をかけて行った。ここにまとめとして、当遺構の特徴を幾つか記してみたい。

1.　住居の構造について

2号住居址は、炭化材の残り具合と、周溝の切り合い関係より縮小改築されたと判断した。縮小改築の住居址としては常呂町のトコロチャシオホーツク地点7,8,9号等が挙げられる。いずれも縮小・改築に際して旧住居と同レベルか、あるいはそれよりも高いレベルで構築されているのに対して、当２号住居址は、さらに掘り込んで改築されている。従って南東側の一部で縮小住居の壁の立ち上がりを観察することができた。北方向では地山が傾斜しており、南東側で検出できた壁土とは違う土質をしていた可能性が高い。北側の周溝の外側にその痕跡を見つけることはできなかった。また、壁の立ち上がりは低く、浅い住居址であったと思われる。

2号住居址の有効床面積は37.4㎡と小さい。これは今まで報告された竪穴住居と比べても最小に近く、刻文土器を主体的に伴う住居址の面積平均は、57.4㎡であり、平均以下である。なお、標高40m以上と同じ条件に立地し、貼付文土器を伴う網走市の二ツ岩遺跡1～3号も41.6㎡、35.6㎡、31.7㎡と有効床面積は小さい。立地条件と住居の規模の関係は、今後注意する必要があると思われる。

2号住居址では、当住居址に伴うと考えられる屋外のピットが検出できた。屋内ピットは整合性が認められず、ピットと柱穴の区別が困難であったが、東西の周溝外に掘りこまれたφが大きく深いピットは柱穴ととらえて良いであろう。しかし、これらが2号住居の上屋支持にどのような役割を果たしたのかは明らかではない。建物の支持には屋内のみでなく、屋外からの支持も必要と思われる。現状では屋外でピットを確認できた遺跡は二ツ岩遺跡などわずかの例しかみられない。住居の重複などによって屋外柱穴が発見できない場合もあるかと思うが、オホーツク文化住居址の上屋を構造的に復元するためには、遺構外のさらなる精査が必要となろう。

上屋の骨組みは不明だが、葺き材については一つの可能性を提示できる。屋内中央部にあたるD1を中心として、包含層よりφ5cm以上の礫が中央部に散乱しており（角 2007)、またD1－D3ラインやC'1－ D'1ライン上の断面図では、炭化材の上から焼土が検出されている。炭化材は壁際周辺から

のみ出土しており、この部分に土が被されていたと考えられる。したがって、壁際の屋根裾には土を盛り、屋内中央部の、最も天井が高いと考えられる付近では石を置いていた可能性があろう。ただしその場合、壁周辺の炭化材は屋内構造材だけでなく屋根材も含まれ、壁を挟んで屋外から屋内へ流れ込んだ状態で炭化材が検出されても良いと思うが、そのような痕跡はなく、今までもそのような事例は報告されていないようである。今後の課題としたい。

2号住居址には、炉がなかった。炉はなかったが、住居址は焼けていた。これをどのように理解すればよいであろうか。事故か、不要になったから焼いたのか、何らかの儀式を伴って焼かれたのか、定かではない。いずれにしろ、オホーツク文化住居において火処を伴わないというのは異質であろう。

2. 遺物について

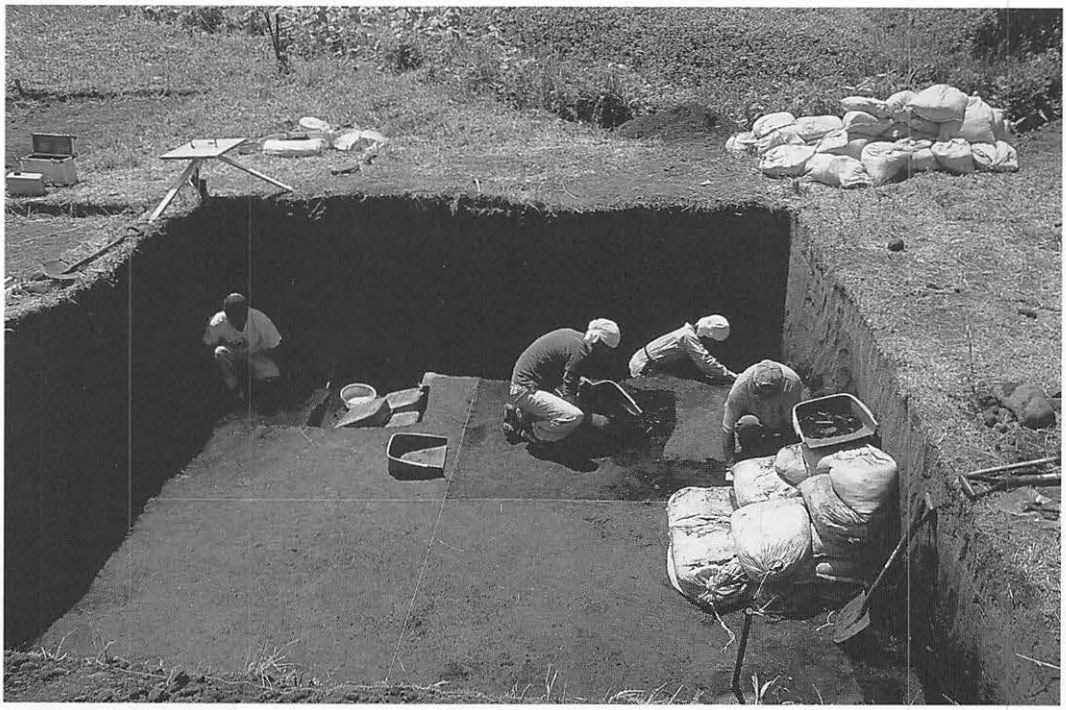
遺物総数は土器、石器、骨角器など約5,000点であった。土器片が約1800、石器が約2700、残りが動物骨と骨角器であった。骨角器に至っては、図示した3点のみの出土であった。二ツ岩遺跡において、銛先などの海獣狩猟具の少なさが指摘されているが、当2号住居址でも同様の傾向が見られる。さらに同住居址では遺物の半数以上を石器が占め、それもある種の石器を製作した後に残った剥片や石核が大量であった。これらが床面や床直上、骨集積地点などから万遍なく出土している。またC1南隅のピット（No.1,2,3）からは数十点の剥片や石核が出土している。

竪穴の規模が小さく、浅いことや炉が見あたらないことなどと、遺物の種類、量、組成などを合わせてみると、住居とするよりもむしろ作業小屋、あるいは一時的な住居とみなすことができるかもしれない。

主要参考文献

天野哲也 2003
「オホーツク文化前期の地域開発について」『北海道大学総合博物館研究報告』1
宇田川洋 2003
『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』東京大学大学院人文社会系研究科
角達之助 2007
「能取岬西岸遺跡発掘調査中間報告」『北海道立北方民族博物館紀要』17
東京大学・常呂町教育委員会 2002
『トコロチャシ跡遺跡群の調査』
戸部千春 1983
「網走市ピラウッルオマナイチャシの分析例」『モヨロ』12　網走市郷土博物館友の会
北海道開拓記念館 1982
『二ツ岩』
北海道立北方民族博物館編 1999
『能取岬周辺の遺跡-美岬4遺跡・能取岬西岸遺跡・美岬5遺跡-』
松尾隆 1998
「『能取岬西岸遺跡』拾遺」『北海道考古学』第34輯
礼文町教育委員会 2000
『香深井5遺跡発掘調査報告書（2）』
山田訓二 1998
『能取岬牧場予定地植生調査報告書』　山田訓二

完掘状況（東から）



発掘風景

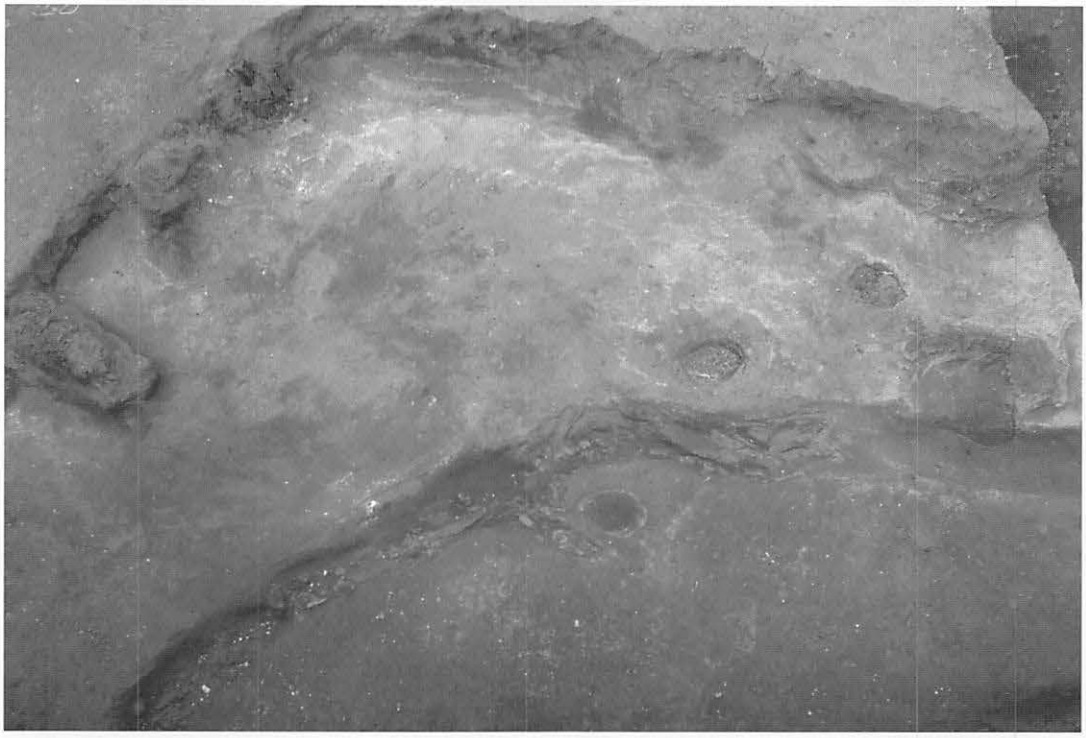
東側の炭化材出土状況（東から）

南東側の炭化材出土状況（東から）

図版3

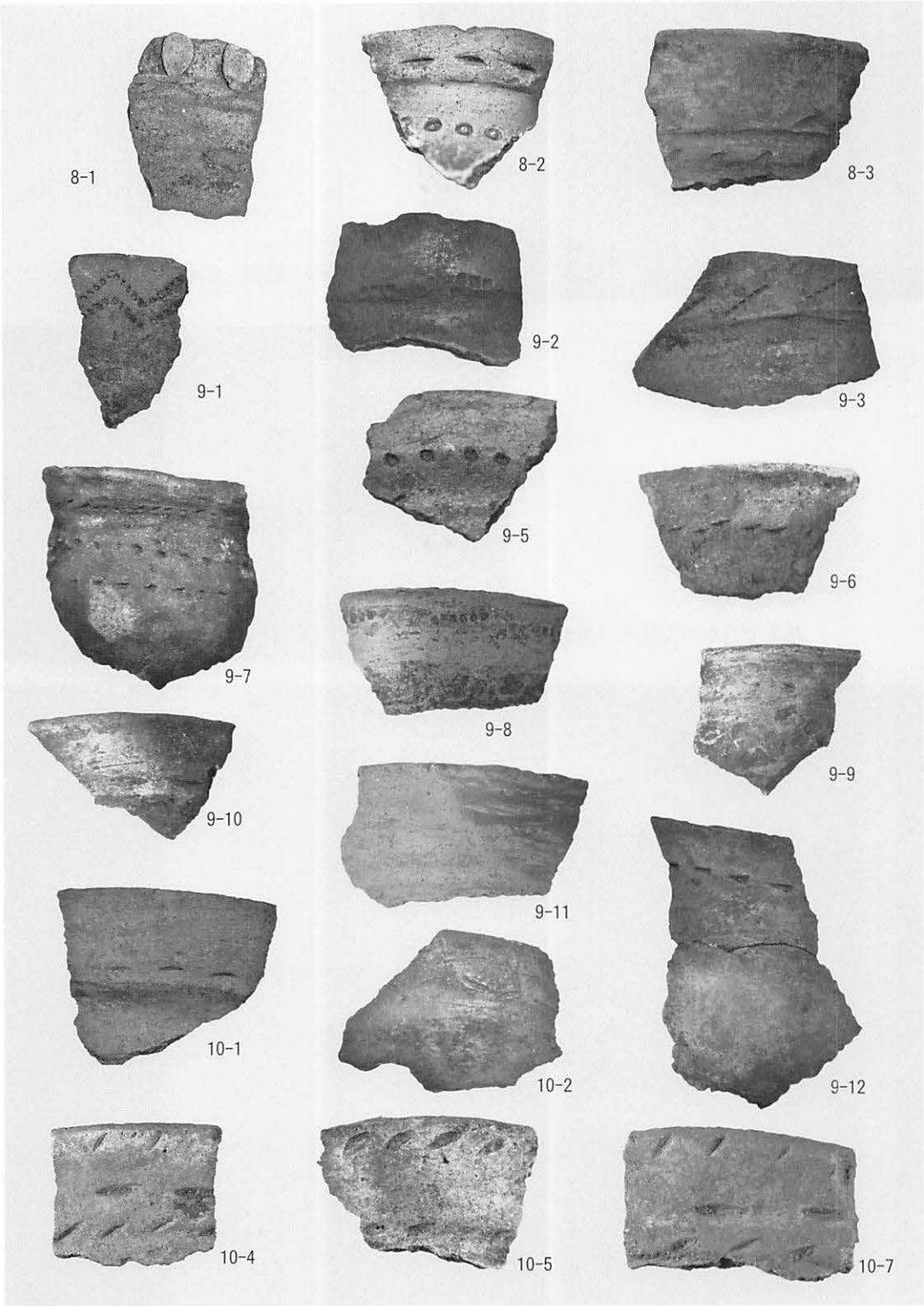
貼り床残骸と石器（南から）

粘土で巻かれた柱穴（東から）



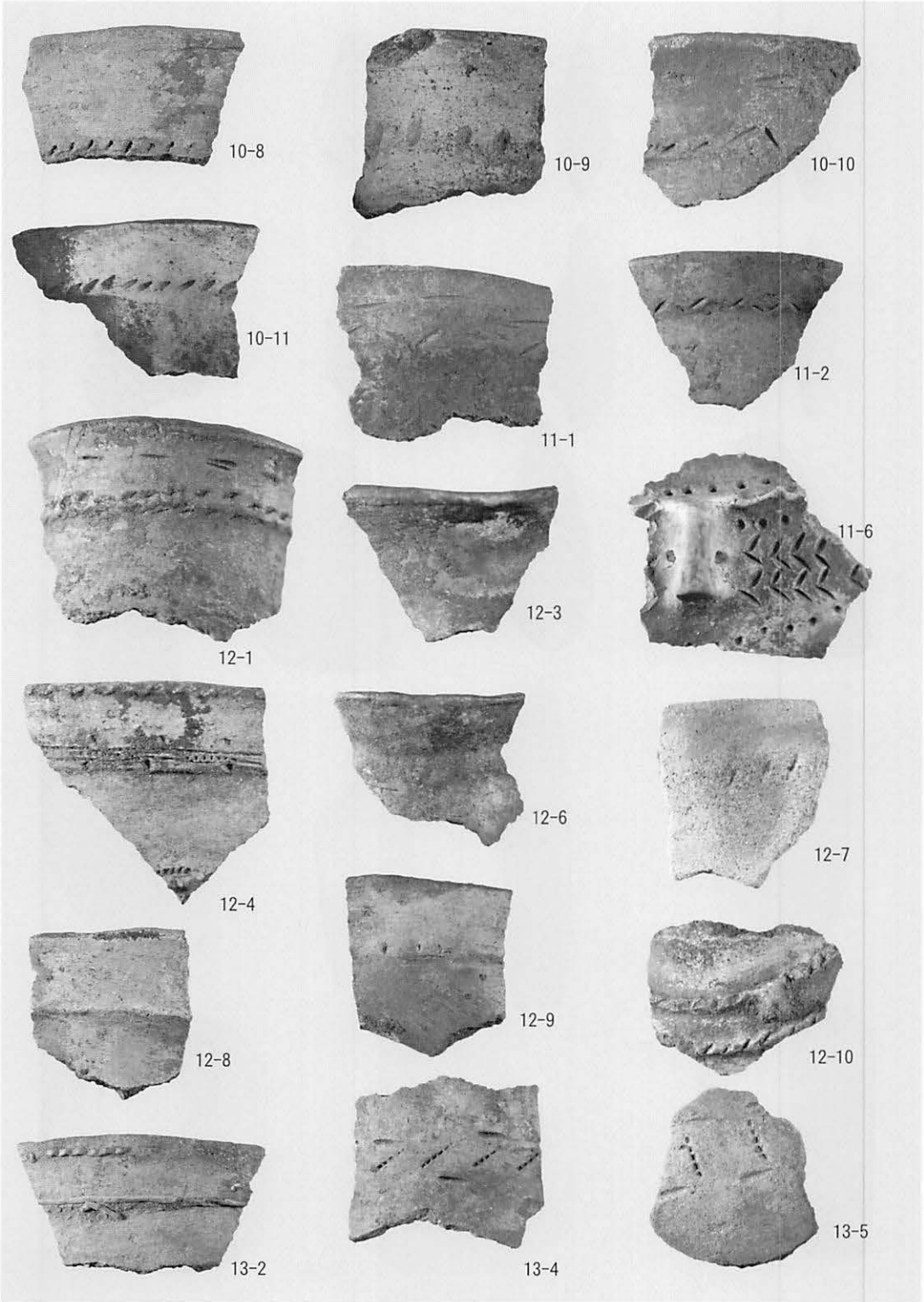
北側の炭化材出土状況と周溝（南から）

図版4（番号は挿図番号と同）



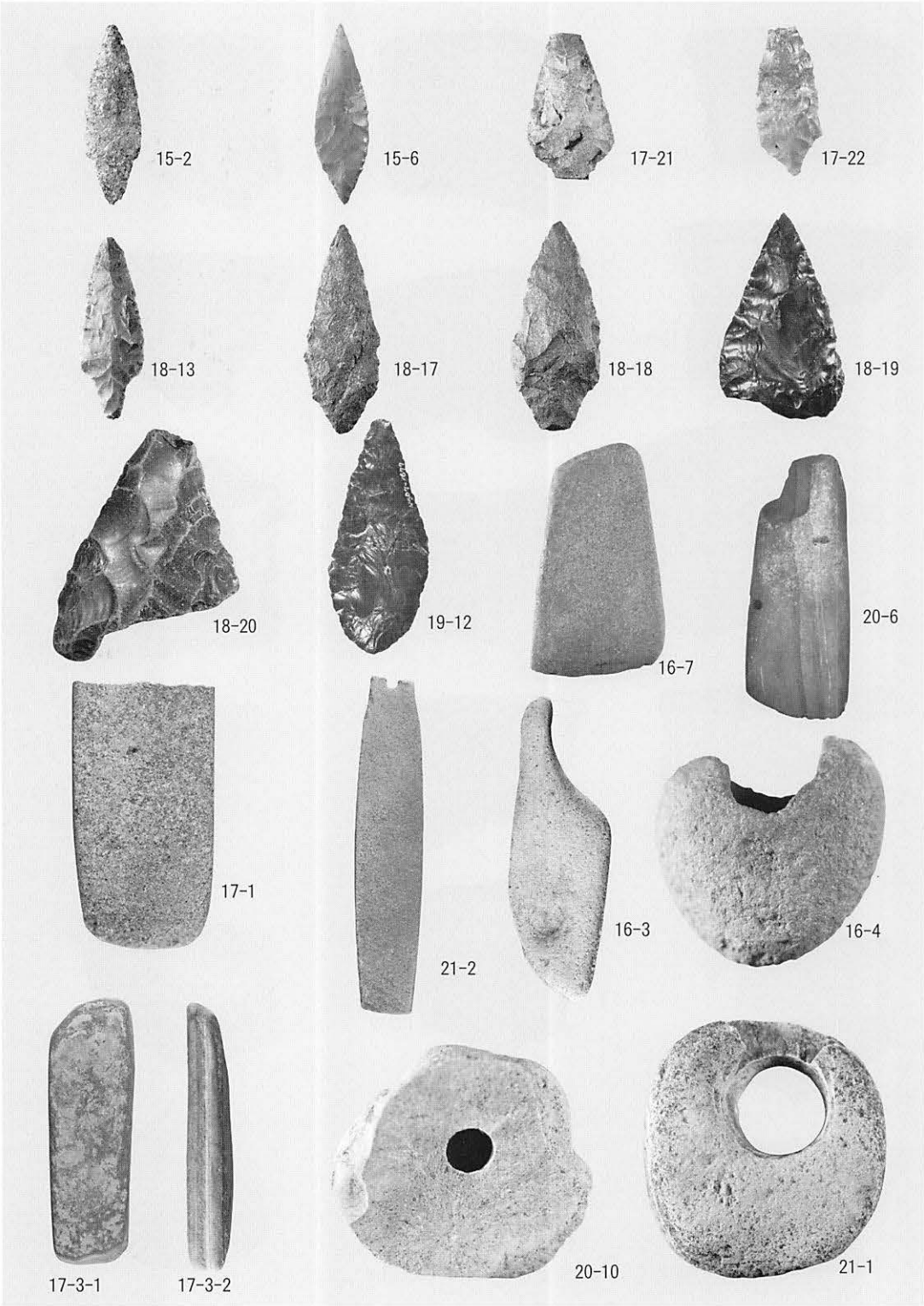
出土土器

図版5（番号は挿図番号と同）



出土土器

図版6（番号は挿図番号と同）



出土石器

報告書抄録

ふりがな	のとろみさきせいがんいせき
書名	能取岬西岸遺跡
巻次	
シリーズ名	北方民族博物館調査報告
シリーズ番号	3
著編者名	角達之助
編集機関	北海道立北方民族博物館
所在地	〒093-0042　北海道網走市字潮見309-1
発行年月日	2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市区町村	遺跡番号	°′″	°′″			
能取岬西岸遺跡（のとろみさきせいがんいせき）	網走市能取岬10番地ほか（あばしりしのとろみさき）	01211	Ⅰ-01-60	44° 06′ 13″	144° 15′ 30″	2005.7 ～ 2008.7	100㎡	博物館の調査研究事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
能取岬西岸遺跡	集落	オホーツク文化	竪穴	土器、石器、炭化材	焼失住居

北方民族博物館研究報告３

能取岬西岸遺跡

平成22(2010)年３月31日　発行

編集・発行：北海道立北方民族博物館

指定管理者：(財) 北方文化振興協会
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1　tel. 0152-45-3888

印　　刷：株式会社 大成印刷